
ねえ、すきだよ。

快丈凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねえ、すきだよ。

【Zマーク】

N1011A

【作者名】

快丈凪

【あらすじ】

初恋をした私に“カワイイ”って言ってくれたキミ…。高校2年の有沢優梨は前野良平に恋をした。果たして、この恋は実るのだろうか…

キミとのやうい。

好き・すき・スキ…何度もこの言葉を繰り返したかな…。
初めてキミに会ったのは…天気予報が大外れした、どしゃぶりの日だったよね。

「おい、有沢！有沢優梨…！」

さうやって、生徒玄関前で雨宿りする私に声をかけてくれたつけ…。

「何？今日遅いね。委員会？そろそろ文化祭だし、有沢って文化祭の実行委員だろ。大変だな」 それまで私の中では、キミなんてただのクラスメイトだった…

「うん…まあ…でも、嫌いじゃないよ。いつこうの…前野君は？委員だっけ？」

「いや、俺は裏方とか仕切るとか向いて無いからさ、どちらかといつとお膳立てしてくれたのに乗つかるタイプなんだよね。」

明るく笑い飛ばすキミ。

キミと話したのはあの日が初めて…でも、キミの匂きない話しさ、私にキミの魅力を気付かせるかの様に鮮やかだった。

「…前野君は？部活？」

「そ。部活。バスケ部。今日はレギュラーテストでさ、遅くなつたんだよ。」

「へえ、スポーツ部なんだあ…す」いね。私つて運動音痴だからスポーツやってる人つて尊敬する。」

「尊敬なんて大袈裟だよ。それに、俺はお前の尊敬に値する様な奴じやないと思うけど…」

「どうして? レギュラーテスト、受けたんでしょ? そのやる気に尊敬だよ。」

「やる気に尊敬? お前、面白い奴だな。」

「そつかな…ふふふ。」

「有沢がそんな風に笑うの初めて見た…笑うと結構カワイイじゃん。クラスでもさ、そうしてなよ。絶対モテる。」

「前野君、変な事言わないでよ。私、カワイくなんかないし…」

「そんな事無いと思うけどなあ…あ、といひで、なんで有沢はここにいんの?」

「私? 天気予報外れちゃってさ、傘忘れて雨宿り。…でも止みそうにないよね…」

ちよつとの沈黙。そしてキミが口を開いた。

「コレ、貸す。」

「えつ…?」

「有沢つて北町だろ? 学校と反対側じゃん。俺たちの辺だし。」

「でも、悪いよ…それに、結構降つてる…風邪引いちやうよ。」

「部活で鍛えてるから大丈夫だよ。それに、レギュラーテスト終わつたし、別に風邪引いても問題ないし。」

まだ少し迷つている私の手に傘を押しつけて、キミは駆け出したよね。

「じゃあなー気をつけて帰れよー！」

あまりにも突然の出来事に、私は呆然としながらこう言った。

「バイバイ、また明日、前野君ー！」

最後まで言い終わらないうちにキミは見えなくなつたよね。手の中の傘を見た。100円の透明なビニール傘。キミとの会話が鮮明に残つてゐる。

『笑うと、結構カワイイじゃん。』

「…結構カワイイか…カワイイのかな…私って…」

そう言いながら傘を広げた。

くつついでたビニール同士がパリパリと剥れていぐ。

「コレ、使つた後干して無いな…」

ブツブツ独り言を言いつつ傘をせじて歩きだす。

ふと上を見上げた。

私は笑つてしまつた。

「ふふふ。何この傘、穴あいてんじゃん。」

“笑うとカワイイ”…のかは別として、私は傘の穴を見て笑つて

いた。

そして、そのままの顔で家に帰つた。

前野良平 忘れられないキミの名前。
つたかくなるキミの名前。」

そして、聞いたら心があ

キリがすきつてきがついた

次の日の朝、私はキリに傘を返した。

「昨日はありがとうございました。助かつた。」

「わざわざありがとうございました。傘、大丈夫だった？」

「それがねえ……」

くすくす笑う私を見てキリと云ふキリ。

「何？なんかおかしかつた？」

「あの傘、穴開いてた。」

くすくす笑いを堪えてやつと言えた言葉。

「えつ……まじで？気付かなかつた…悪かつたなあ……」

「ううん。別に大丈夫だつたんだけど、なんか面白かつたの。」

「何が？穴開いてた事？」

「まあね。でも、それだけじゃなくて前野君の事、昨日初めて知れて…良かつたなって。」

「俺も。有沢の事ちゃんとしたのつて昨日。まあお互い良かつたじゃん。俺の事め、良平でいいよ。」

「私も優梨で。レギュラー、いつ発表？」

「今日の部活、受かってるかな……昨日もあんまり寝れなくて…」

「頑張ったんだから大丈夫！私も応援してる。」

「わづか？んじゅあ結果が分かつたら、優梨に一番最初に話す。」

「うん。楽しみにしてるー。」

「おづ！それじゃ、俺、ちよつと職員室に行かなきゃ……じゃあな！」
“またね”今まで男の子に言つた事なんてなかった。初めての相手がキミだった。

「何？優梨、前野と仲良いじゃん。どしたの？」

「亜花莉……実は良平君に昨日傘借りてさ、さつき返してたの。」

「ふう～ん……ホントにそれだけ？」

「それだけだよ。別にそれ以外何も無かつたし。」

「ま、私には彼氏いるからさ、どーでも良いけど、前野の事狙つてる女子、意外と多いから、頑張ってね。」

「だからあ～、違つて言つてんじやん！」

口ではそう言いながらも、心中ではちよつと落ち込んだ。

昨日、家に帰つてからも、ずっと眺めてたキミの傘。

よく分からぬけど、キミの言葉が木靈する。

『笑うとカワイイ』

…キミの目に映った私はカワイイ女の子だった?
…キミの前で私は、笑顔だった?
そんな自問自答ばかり繰り返してた。

心の中に、キミが居る。

キミが眠れない夜…私も眠れなかつたよ。理由は違つたけど。
自分の好きな歌手のラブソングを聞いた。
今までは他人事みたいだつた歌詞が、自分の事を歌つてゐるのか?
…と思う程共感した。
すきだよ。キミが。

初めてだよ。

こんな気持ち。心が君の言葉と笑顔で染まつていいくのが分かる。
恋つて、思い続けて実るものだつて思つてた。
でも、私は違つた。これを世間一般では、‘一目惚れ’つてい
うんだよ…

キミは私にどういうつもりで“カワイイ”つて言つたか分からな
いけど、君の笑顔と言葉が、私の心でとろけあつ。
前野良平 私が初めてスキだつて思つた人の名前。初恋の言葉。
一目惚れの相手。

キミのなみだ

学校の帰り道、やつぱり考えていた事はキミの事だった。

(レギュラー大丈夫だったかな：良平君、もう帰ったかな…)
結局、実行委員会の仕事も口クにこなせず、先輩に怒られてばかりだった。

今日はあまりにも気持ちが落ち着かない。キミの心配事は、私の心配事になつてた。

こうやって気持ちが落ち着かない時や、気分を変えたい時は、いつもと違う道を通つて帰る。今日は裏口から帰る。

校舎裏にある裏口。

普段は全く人がいない。だから私のお気に入りの散歩コース。

大きな紅葉の木。

真っ赤な落ち葉。

桜みたいに可憐な散り方はしないけど、私は紅葉の方が好きだった。

た。

「小さい秋、小さい秋、小さい秋、みい～つけた。」

つい童謡を口づさむ。これも楽しい。

「目え～隠し鬼さん手～」の鳴る方へ…」

…その続きは歌えなかつた。

キミがいた。

キミと目が合つた。

「優梨？今歌つてた奴つて、優梨か？」

キミは目を丸くして私に聞いたつけ。私はとにかく恥ずかしくて何も言えなかつた。

「すげえな。俺も、すんげえ音痴だから、歌とか歌えねえよ。」

「わつ…私も音痴だけど…誰もいないと思ったから…」

キミのせいだよ。キミのせいで顔が紅葉みたいになつてゆく。

「あ、そんな事より、良平君、テストはどうだったの？発表、あつたんでしょ？」

その瞬間、聞かなきや良かつたつて思つた。

だつて、キミは分かりやすごぐりこに顔を曇らせたんだもん。

「…落ちた。」

沈黙。落ち込んだキミに、私はなんて声をかけたら良いの？

「そつか…残念だつたね…」

また沈黙。

私は顔をあげられなかつた。田が合ひつと、その悲しそうな田を見ると、絶対泣くから。

「でもや、一応準レギュラーにはなれたんだ。だから、頑張ればまだチャンスはあるよ。」

「うん…そうだねー私、応援してーだからさ、準なんて早く卒業しちゃって、レギュラーになろー！」

「おうー。」「おおー。」

そう言いつつも、キミの田は笑つてない。
すると、キミのまあるい田から、涙の粒が落ちた。

「あ、なんだよ。俺、カツ『悪つ！泣いてやんの。』

キミの涙は止まらない。

「俺も、今まで…つていつても、幼稚園から先は、泣いた事、無か

つたんだぜ。」

切れ切れの言葉。私の心はもつゝ泣。キミの涙が私の心に流れたのかな…

「あ～、ちくしょう、止まんねえ。涙つて、こんなに止まんなかつたっけ。」

キミの涙は、まだ止まらない。

「俺さ、弱くなつたんだよな…昔はこんななんじやなかつた…」

私の口は、勝手に開いてた。そして無意識に言った。

「いいじやん、泣いたつて、カツ「悪くなんてないよ。」

キミは、驚いた様にこっちを見る。

「もし良かつたら、泣いちゃいなよ。

すつきりするよ。」

キミの瞳に溜まつてゆく涙。

「泣く事を我慢しないで。大丈夫。私、笑わないし、見ない。」

そう言つた瞬間、キミの目から大粒の涙。

キミは大きな声で泣いた。

「…おさまつた？」

「…ああ。」

やつとキミが泣き終えた。

長かつたような…短かつたような…不思議な感覚。

私はキミの側を離れられなかつた。キミを直視出来ないけど、側にいたいと思つた。落ち葉の上で、座り込む私たち。

「ありがとう。」

「え？」

「泣いた」「口見られたのが優梨で良かった。」

「ホントにレギュラー、なりたかつたんだね。だからあんなに泣いたんだね。」

またちゅうと沈黙

「泣きなよ、良平君。私の前で良かつたら。」

「ばか。男がそんなに簡単に泣けるか。」

「良いじやん。でも、楽になつたでしょ？」

「まあな。」

「そう言つて立ち上がるキリ。私の前に手をさしだす。

「送つてぐ。」

「えつ？」

「もう、暗くなつてきたし、明日は休みだし、部活ないし…送つてくれ。」

「そんな、大丈夫だよー。一人で帰れる。」

「お前が良くても、俺が心配なんだよ。ほら。」

そう言って、さりに手をさしだすキミ。

キミの手に触れる。ひんやりとどこか冷たい。

お互い、黙つたまま歩いた。話かける言葉が見当たらない。

家の前に着いた。

「そんじゃ、ここで…良平君、大丈夫？」

「おう！大丈夫だよ…！」

キミの笑顔。良かつた。笑顔が戻った。

「俺さ、あんな風に人に弱みを見せたのって、優梨が初めてだよ。」

「そうなんだ。…なんか光栄。」

「おう！永久保存版だぜ。」

お互い笑った。そして、キミは帰れる。

「それじゃあな、優梨！また学校で！」

「うん。また学校でね！」

キミの笑顔がまだ残ってる。なんで？

キミの泣き顔がまだ残ってる。どうして？

キミの笑顔も泣き顔も、全部大好き。

私の前では弱みを見せてつて言ったの、嘘じやないよ。

いろんなキミが見たいの。もつと見せて。

前野良平 笑顔に溢れた。泣き顔が浮かぶ名前。大切なキミの名

前。

#IIからいの「」

キミの涙は七色だった。光る、綺麗な粒だった。

キミの涙を見たあの日から1週間たった。

あれからの私たちに変化はない。

ただ、キミが泣いた次の週、キミの目は少し腫れてたけど…

「…ちゃんと有沢ちゃんと…」

「…う、はー!」

「どうしたの? 最近、ボーッとしてばかりで…」

「…すこせせん…」

「疲れてるとは思つけど、文化祭は明日よ。もう少し頑張りましょ
うね。」

「はー…すこせんでした、佐藤先輩…」

私は文化祭の実行委員。

別に好きでなつた訳じゃたいけど学校全体を運営する…といつ事に魅力を感じていた。

なのに…キミに会つてからは…#IIの事がつかつ…

「あ、そつそう、有沢さん、あなたのクラス、出し物…劇だったわよね?」

「…えつ、はい…」

劇は、私たちのクラスのオリジナル劇。学校の生徒や先生がタイムスリップする…といつものだ。「有沢さんは劇に出るの?」

「いえ…裏方です…」

確か、キミも裏方だつたよね。

「何係?」

「衣装です…」

キミは舞台装置係…主人公がとても似合いそうだけど、余つた役がそれだけだつたから…キミは裏方になつたね。

「それが…何か?」

「それがね、受付係が足りないの。2年の出し物の時だけ、他の委員がみんな出払つてるのよ。…それで、あなたしか空いてる人いないのよ…だから…」

「はい、いいですよ。やります。」

「そう、良かつた!…とっても助かるわ。ごめんなさいね…あなたも見たいかもしれないけど、2年生全員の…1時間だけでいいから。」

「いえ、構いません。衣装係だから当口は

特に役もないんで…」

「そう言つてくれるとありがたいわ。それじゃ、明日、よろしくね。
仕事の内容は明日言うから。」

帰り道、なんか今日も裏口から帰りたかった。

ホントは劇見たかった。

亜花莉がヒロイン役だし、実行委員会とかで口クに劇も見てなか
つた。

何で見たかつたって言わなかつたんだろ。

相手が先輩だつたから？

人手が足りないから？

…違う。私は自分の意見が言えないんだ。

ふと上を見る。休みの間に結構散つた紅葉。足元にはたくさんのが
枯れ葉。

その中の一枚を拾う。真っ赤な紅葉。綺麗…

そうつとポツケにしまつ。

キミに会いたい。

キミと話がしたい。キミに想いが伝わらなくても、ずっと一緒に
に居たひつて思ひ…

「お～い、優梨ー！」

キミの声？

振り返る。

…キミだ。

せつときから、ずっと見たいと思つてたキミの笑顔。

「優梨ー…やつぱりー」つちから帰つてたー！」

「…やつぱりー？」

「お前がさ、今日はいつか通るかなつて思つたんだよ。だから、そ

の辺で待つてた。」

キミが指差したのは、この前キミと私が座つてた辺り。

「「めん… 考え事してて気がつかなかつた…」

「いいよ。実行委員会だつたんだる。明日だもんな。」

「ねえ、クラスの出し物つて、どれくらい進んでる？明日大丈夫？」

「えつ…？先週は俺もレギュラーテストとかで出らんなかつたけど、今日みた限りだと、大丈夫そうだよ。」

「そつかあ… 良かつた。」

「優梨、自分がクラスのに出らんないから気にしてんのか？大丈夫。順調。北里も上手いし。」

北里は、亜花莉の名字。

「うん、良かった。気に入つてたから。」

「明日、忙しいのか？」

「うん… 1日目は忙しいな。2日目はまだ大丈夫そうだけど…」

因に、文化祭は1日目に各クラスでの出し物や発表、2日目はグラウンドを利用した模擬店やバザーになつていてる。

私のクラスは1日目に劇、2日目に模擬店の予定だ。

「大変だし、忙しいとは思つけど、自分が楽しめよ。」

「えつ…？」

突然のキミの言葉。

「優梨ひ、無理してない？っていうか責任感強すぎな上に細かい所気にし過ぎー確かに、お前の仕事はみんなを楽しませるものだけど、お前も楽しめなきゃ文化祭は成功しないぜ。」

キミはなんでもお見通し。

無理してたよ、たくさん。嫌だつたよ、委員会。でも、気付いたら決まつてて、自分はやらなきゃいけないんだって思い込んでたの。

「あのや、2田田、俺とまわらない？いろんなとこ」。

「

「えつ…？」

キミがこっちを向く。
真っ直ぐ私を見てる。

「好きだ。」

キミは、今何て言つたの？

「俺、2年で、同じクラスになつてから…お前ばつが見てた。
ねえ、これつて…皆白っ

「もしよかつたら…俺たち付き合わないか？」
付き合つへ彼氏と彼女になるつて事？

「あつ…あの…私…」

なんで？なんで言えないの？私も“好きだ”つて…

「返事は…今度で良い。」

…じゃあ…また明日。」

そう言いながら、キミは帰つて行つた。

キミは私の事、好きだつたの？

私、キミの事、1週間前まではなんとも思つてなかつたんだよ？

それなのに…2年生になつてからずつと…？

キミはほしい。

私の心を惑わせてばかり。

私は…自分が嫌になるくらいキミが好き。

心なんて…ずっと前からキミに渡してゐる。

前野良平 聞くと愛しくなる名前、聞いただけで優しくなれる名前。大事な大事なあなたの名前。

キミとわたしのあむか

キミは言った。

私の事がスキだつて。

でも…私は何も言えなかつた。

キミ昨日、告白された。

1週間前からスキになつた私。

半年以上も前から私をスキになつとくれてたキミ…

こんなに自分がもどかしかつた事、なかつた。

でも、今日、キミに話すよ。

キミがスキつて。

「…つといふ訳で、今日の動きはこんなカンジです。」

先輩の声。今は開会式の後で、

委員や係が今日の動きの説明を受けている。

「それから、変更がひとつだけ。」

みんなが顔を上げて先輩を見る。

「有沢さんが2年のクラス発表の時の受付係になつてくれました。みんな、一斉にこっちを見る。私は小さく、

「お願いします…」

と言つので精一杯だつた。

「ええ？…優梨、劇見らんないの？」

1年生最後の組が出し物をしてる。私たちのクラス発表まで、あと15分。

本番用に準備万端な亜花莉が素頓狂な声を上げる。

「うそ…なんか、ちょっと2年の出し物の時に受付係がいなくて…」

「いらっしゃ人手不足だからって…優梨が行かなきゃいけないなんて…」

「ホントにじめんね。でも、委員会でビデオ録ってるから後で見せてもらひ。」

「そつか…まあ、委員会の先輩、怖そつだしね…」

「まあね。」

一人で笑いあつ。

「優梨に私の勇姿見てもらえないのは残念だけどさ、優梨のそーゆーとこ、好きだよ。」

「ありがとう。亜花莉、がんばって!セリフとちつたら恥ずかしいよ。」

「優梨こそ、パンフ渡し忘れちゃ恥ずかしいよ。そっちもがんばつてね。」

劇がはじまつた。亜花莉の声が聞こえる。

受付係の席には、私だけ。

空しくなつて溜め息。

ふと正面をぼーっと見つめる。遠く、小さく見えるのは、あの紅葉。昨日よりもまた葉っぱが減つてる。

そういえば……キミに今日、まだ会っていない。

さびしいよ。キミに会えないのは。

昨日の告白を、嘘みたいに思えてくる。

また溜め息。

そんな時、後ろの方で懐かしい声が聞こえた。

「ひりひ、ひやんと仕事しin。優梨。」

慌てて振り返る。

キミだ。キミがいた。

「なんで?」

まだ、劇の真っ最中。それなのに……

「北里に聞いた。優梨、一人でここにいるって……」

「亜花莉が……」

「今日、優梨と話してないなって思つてた。」

私もだよ。

「そうだね……とりあえず、おはよう。」

「9時半におはようって言われてもなあ……
くすくす笑いだすキミ。」

「ははは。やっぱ優梨は面白いな。」

「そつ……そつかな……」

顔が赤くなるのが自分でも分かるよ。

ちゅうと沈黙。

キミが口を開いた。

「…昨日の…事だけど…」

私はうつむいてしまった。キミがこいつをはつきり見つめるが分かつたから。

でも、これじゃだめだ。

キミの事、スキって伝えなきや。

このままじや、絶対後悔する。

キミをじっと見つめる。キミは少し驚いているね。

心臓は爆発寸前。

顔が熱い。

「私も、良平君が…好きです。」

また、ちゅうと沈黙。

信じらんないって顔してゐるキミ。

「つて事は…？俺たち四人…？」

「…ちゅうなるのかな…」

「マジで？嘘じゃないよな？」

「うん。」

私がやつ言つと、キミは私を抱き締めた。

「俺、今生まれてきて一番嬉しい。」

私も。

キミのぬくもりが…直接私に入り込む。あつたかい。

しばらくしてから、きみは私を放して、聞いた。

「…ところどさ、優梨はいつから俺が好きになつたんだ?」

「えつ…」

一番聞かれなくない質問…

「実はね…一週間前なの…」

「へつ?一週間前?」

素頓狂なキミの声。

当たり前か…驚くよね…そりや…でも、キミは別の事で驚いてた。

「一週間前ってこいつ…あの雨の日の?..」

「…そう…傘貸してくれた日…良平君のこと…はじめて知れた日だし…傘まで貸してくれて…優しいなって…」

私がそう言つた瞬間…キミは笑い出した。

話がさつぱり分からないので、キョトン…としてたら、キミが笑いを堪えながら言つた。

「『めんめん…俺も、あの日、優梨に嫌われたと思つてたんだよ。』

「

「えつ……なんで？」

「だつて……穴の開いた傘、貸したんだぞ。絶対嫌なヤツだと思われたと思ったんだよ。」

「…私、そんな態度だった？」

「いや、優梨は思つてたのと正反対でさ、でも印象悪くなつたわうなつて思つてたんだよ。」

「全然。なんか面白かったし。」

「俺に言わせれば、お前が一番面白いよ。」

そう言つとキミはまた笑つた。

私も笑つた。

「ううして、私とキミは恋人同士になれた。

ありがとう。

これからもよろしくね。

「有沢さん、受付係、交替します。すいませんでしたー！
そう言つて、1年の後輩がきた。

「あ、はい。

それじゃあ、クラスに戻ります。」

なぜか、年下に敬語…な私…

「優梨、行こいつ。」

キミと、体育館に向かつた。

「優梨、あのさ、明日だけ…」
入口の近くでキミが言った。

「明日、空いてるときに…一緒にまわらないか?」

「うん。もうしよう。私昨日言われた時からもうしたいなって思つてたし。」

「よしぃ、んじゃあ約束だぞ。」

「うん。約束!」

「よし、良かつた…あ、それじゃ、田辺が呼んでる。またな。」

田辺君は、良平君の友達で、亜花莉の彼氏。

「うん、またね。」

良平君と分かれたところで、亜花莉が追いかけてきた。

「優梨…さつきのつて、前野だよね?なんかあつたの?」

「…告白されて…付き合つ事になつたの。」

「良かつたじやん…好きだつたんでしょう?前野の事…」

「やうなの。良かつた…」

キミの笑顔が見える。とても眩しい。

前野良平…キミの笑顔、心から守りたい。そう思える名前。

大好きなキミの…大切な名前…。大好きなキミの…大切な名前…。

#ハルニヘラア（繪書）

6話めにしてはじめて前書きをしてみました。
今回は優梨と畠花莉の会話中心です。いつもとは少し雰囲気を変
えてみました。

良ければ読んでやって下さい。

まだ胸がドキドキする。

まだ、キミのぬくもりが残つてゐる。

キミと両思いになれた。信じられないけど、本当。

「まさか、前野と付き合つとはね~」

文化祭の一日目の日程が終わり、亜花莉との帰り道。

「あのむ、前野つて、結構人気あるのよ。知つてるでしょ?」

知つてる。だって私の彼氏だもん。

「うん。優しいし…スポーツとかもできる方だしね。」

「それだけじゃないよ。顔よ。イケてる方なのよ。」

「あ、顔かあ…キヨーミないんだけどな…」

「うん。カッコ良いよ。」

「ま、だから大概の女子は好きになる訳よ」

私は…キミの外側が好きになつた訳じゃないんだけどな…

キミの優しさに触れて…キミの側に居たいと思つて…ただそれだけ…

「なんかそれって…動機不純。外見とかばっかりつて…」

「所詮、女つてそんなもんよ。じゃなきゃなんでアイドルなんかに熱上げんのよ。」

…まあ、確かに。

「それじゃ、

良平君つて…吉田とか…いっぱいされたのかな…」

「そりやね。私が知る限りじゃ、優梨と付き合つままでにフタケタはあるね。」

…すごいな…良平君…

…でもね…」

ふふふ…と、亜花莉が不敵に笑う。

「…なによ? 「

「前野の断る時の決まり文句、教えてあげよつか?」

…えつ?

「『俺、気になる奴がいるんだ。俺の片思いかもしれないけど、今はそいつの事しか考えられない』…だつて!」

…一方的な片思い…まあ、一方的なのが片思いなんだと思つけどそれって?…私?

「それ、ホント?」

「真章まさふみが言つんだから間違えないわよ。」

真章君は、田辺君の下の名前で、良平君の友達兼亜花莉の彼氏。

「…好きな奴つて…」

「決まつてるでしょ。優梨よ。それしかないじゃない。今まで、誰の事が分からなかつたけどね。」

キミが、私をずっと前から好きだったの、ホントだったんだね。キミに、見向きもしなかつた私…

それなのに、わざわざ告白してくれた子を断つてくれていたんだね。

好き。スキ。すき。…好きだよ。キミの事。

「まあ、これで、晴れてあんたたちもカレカノね」

亜花莉が、いたずらっぽく笑う。

私は顔が赤くなる。

「なんか、照れる。彼氏…とか。」

「初々しいね。あんたら。」

溜め息をつきながら亜花莉は言つ。

「なんか、純愛小説をタダで見せてもらつてるカンジ。」

「

「純愛だなんて…亜花莉にも彼氏いるじゃん。」

「誰も真章より前野が良いなんて言つてないわよ。でも、付き合い始めの頃を思いだすな…」

「そう言いながら遠くを見つめる亜花莉。

幸せそうな…満たされた笑顔。

「あんたたち、明日、2人でまわるんでしょう。」

急に話題と態度が変わる亜花莉。

「うん。空いてる時間について…」

「んじゃ、ダブルデートしよう。けいづじ4人とも同じ係だったじゃん。」

「私たちはバザーの集計係。

だから、始めと終わりだけの仕事で、仕事の無い時に一人でまわる約束をしてしたのだ。

「そうだね。楽しそう。」

「でしょ。真章に、前野に伝えてくれる様に頼んどくから。」

「うん。分かった。じゃあ、明日は4人で。」

「よっし、決まり。そんじゃ、また明日ー！」

そう言つて亜花莉は分かれ道を右に曲がった。

「うん。また明日ー！」

私は左に曲がる。

ポケットから、メモ帳を取り出す。

その中に、大切に挟んでいる紅葉。あの時の紅葉。沈んでいく夕日にそつと透かしてみる。

紅葉の朱と太陽の赤がキレイだ。

前野良平…照れてしまつけど、私の彼氏の名前。

ずっと前から私を思つてくれた、キミの名前。

#IIとニアリア（後書き）

いかがでしょうか？今日は会話ばかりでした。次回はとつとつダブルデートで、今から私自身もドキドキします。小説を読んでの感想やアドバイス、評価等、して下さると助かります＆嬉しいです。

それでは7話でお会いしましょう！

キミとつないだ、てのひら

ずっと、ずっと私をスキだつたキミ。ずつとキミがスキだつた私。

やつと回思になれた

文化祭2日目。今日はキリコとあつと一緒に

こんな自問自答を、昨日から何回繰り返したかな。

「優梨ー！おっはようー！」

いつもの明るい声で声で亜花莉が声をかけてきた。

「おまかせ。今田、楽しみだね！」

うん。こていうが、あんたたち、今田のか事実上初テートな訴？」

「おつはよつ！ 優梨ーー！」

キミが来た。

いつもと同じで、明るい声。

ただ、いつもと違うのは私

曰からに恋人同士

真童から聞いた。今田、久人で圓を三三で

「 」

גָּדוֹלָה עַל־

「どういぢなう」「入つまつがよかつた

「でも、私たちの事はまだみんな知らないし……」

『キミは女子から人気があるから。』

言葉を途中で飲み込んだ。

そんな事、キミに言えるはずがない。

「そー ゆー のつて、関係あんのかなあ……俺は別に気にしないんだけど……」

「……そー ゆー もん。」

言葉に詰まる私に、亜花莉の助け船。

「いい、前野。あんた、文化祭最終日＝ラブラブなデートなんて、あんたちぐらいなのよ。みんなバカップルだけだと思わないで。」

「バカップルとはなんだよ。それはお前らだろ。」

「なによ。恋愛初心者のくせに今年で3年目の先輩に向かつてその態度。」

「れ……恋愛初心者……」

「まあ、あれだ。俺たちはバカップルなんてとつに過ぎてるんだよ。」

田辺君が口を挟む。

「だから、俺たちに向かつて何でも知ってるみたいな口をくなよ。」

「まつ……真章い……」

「有沢、コイツまだまだ考えの浅い3歳児だけど、よろしくな。俺からも頼むわ。」

「なんだよ。お前らまで。まあ、いいよ。その代わり一人つきりにさせろよ。」

「はこはーい。」

「ど、亜花莉。」

「おアツいねえ。秋なのに、夏に戻ったか。」

「……と、田辺君。」

私は笑った。同時に言葉に詰まる私を見てフォローしてくれた二人に、感謝した。

二人つきり……いつその場面が来るか分からないけど……そんな時、私はどんな顔をしたらいいの？

キミの事、スキだつて言い切る自信、あるよ。

キミと話したいこと、伝えたいこと、知りたいこと……でも……もし会話が途切れたら？

もしキミが嫌がる話をしちゃつたら？

……そういう時は、どうすればいいのかな。

こうして、キミの事で一喜一憂する。

これって、きっとすごく幸せな事だよね……

「はい、じゃあ集計係は今のところこれでOK。後は全部終わってからまたお願ひします。」

クラス委員長・松下さん。バザーを総合的に取り仕切っている人。私たちは集計係で、今のところ仕事は無い。なのでこれから自由時間。

「ちょっと、優梨。」

亜花莉が私を呼び出す。

「なあに？」

「あのさ、ホントに一人が良かつたら、私たち退散するけど……いいの？」

「いいの。亜花莉たちが居てくれると安心だし……」

「そう?なら良いんだけど……」

きっと、亜花莉は私の浮かない顔を見て、一人にしたほうが良いと思つたんだろう。

でも、私が考へてるのは正反対。

これって……キミに凄く失礼だよね……

小さな溜め息を、みんなに聞こえないようにそっとした。

文化祭は最終日ということもあってか、昨日とはまた違う盛り上がりだった。

亜花莉と田辺君が前、私とキミがその後ろ……

私は口数が少ない……

キミは田辺君や亜花莉と話している。

私のこと、つまらないヤツって思ったのかな……

そんな時、急にキミが私の手を掴んだ。

…といつても、急だつたから手首…に近いけど…

「？！… 良平くん…？」

「わりい、俺、やっぱり優梨と一緒にいる。」

「良平…」

田辺君も驚いている。亜花莉も。

でも、一番ビックリしているのは私。

私の手首を掴んで、キミは人込みを避けて校舎裏に…あの紅葉の

木の場所に…

「… 良平君…？」

「…」

キミは何も言わない。

…キミ、怒つてゐる。

言わなくとも、何となく分かる。

背中を私に向けて…キミは口を開いた。

「なあ、俺… とっても… 楽しくないか…？」

「…えつ？」

「だつて、優梨…俺といつもみたいに話してくれないじゃん。」

「それは…」

どうしても、キミと話をする前に…悪い事を考へてしまつ。

「あのさ、嫌なはつきり言つてくれよ。俺が嫌だったら…無理に付き合つてくれなくていいよ。」

「そんな… 無理してないよ。」

「じゃあ、なんでダブルデートにしたんだよ。俺と付き合つてるのは恥ずかしい事なのか？」

「そんな事ないよ… ただ…」

「ただ？」

…もう、言つた方がいいのかなあ…

「… 良平君… 女子から人気あり過ぎなの。」

「えつ？！」

キミの驚いた顔。相当予想外だつたみたい。

「自覚、無いかもしれないけど……そりなの。だから……私が彼女って知られたら……」

「…理由、それ？」

「…」の際…はつきり言つといひ。

「口数が少ないのは…話をしようと思つても、その場の雰囲気とか壊したら嫌だから…そう考えたら話できないの。」

…それを言い終わつたら…キミは急に笑い出した。

私は脱力。紅葉の木の側に座り込んだ。

「悪い悪い。…でも…そんなことで…」

「そんなことじやないよ。真剣に悩んでたんだから。」

「…あのせ、」

急に真面目な顔になつたキミ。

「女子から人氣があつても、そんなこと関係ないんだよ。実際に付き合つてるのは俺たちだろ。」

真剣なキミの瞳。

「ただけど…」

それでも、まだ煮え切らない態度の私。

「それとも優梨は、俺が優梨の事を口クに守れない様なヤツだと思つてるのか？」

「そんなことないよ！」

そう言つと、キミは私の頭を包み込む様に抱き締めた。

「俺さ、不器用なんだよ。」

キミが、耳元でそつと囁く。

「もし器用なヤツなら、そつとお前がスキだつて言えるよ。でも俺はそれが出来なかつたんだよ。」

キミの声を、全身で感じる。

「でも、俺、お前を守る自信はある。」

そう言つとキミはまた私を見つめる。

「だから、優梨には何でも言つて欲しい。良い事、嫌な事、悲しい事、悩んでる事…」

キミの優しさが…キミの言葉に乗せて…私に流れていく。

私は何を悩んでいたんだろ?…

キミはこんなにも私を思つてしてくれるの?…

「私も…自信あるよ。」

キミを見つめる私。

優しいキミのまなざし。

「自信?」

「そう…良平君が世界で一番大好きでこられる自信。」

いたずらっぽく笑う私。

キミもほほ笑む。

「これからもよろしくな。俺、真章の言つとおり…3歳児かもしけ

ないけど…」

だもん。」

「コイツ…言つたな…」

キミが頭を優しく私の頭にくつつける。

キミの顔が近い。

ついこの前までは考えられなかつた事。

これからも…擦れ違つ事、勘違いする事、仲違いする事、あると思つ。

でも、それでも、キミと一緒に居られるなら…乗り切れそうだよ。

こんな私を…これからもどうぞよろしく。

「…そろそろ行くか…何気に昼時だし…」

「うん。ちょっとお腹減つたね。」

「ちょっと?俺はかなり…」

「そうなの?なら、模擬店にでも食べに行こつか?」

「おっし、決まり!行こうぜ。」

左手を差し出す私。

ほほ笑みながら右手をだすキミ。

キミのぬくもりが…手のひらから伝わる。

あつたかいよ。

「のぬくもりを、ずっとずっと…感じていきたい…

模擬店の前に、亜花莉と田辺君がいた。二人とも丼食をとつていた。

「有沢！良平！…」

「あんたら、どこ行つてたの？…急にいなくなつて…」

「プチ喧嘩と仲直り。」

「プチ喧嘩？なんだ、それ…」

「読んで字の如く。ま、仲直りの方が多いけどな。」

「ま、悪い方にいつてないなら別に良いわよ。」

「そーそー。俺たち、それなりに回れたしな。」

「なんだそれ…俺たちの事…心配じやなかつたのかよ…」

「別に。だつてもう高校生じやない。」

「それに、3歳児には説得とか正論は通じないしな。」

「おつ…お前ら…よくもヌケヌケと…」

「有沢あ～…これからもこのお子様が今日以上に迷惑かけると思つけど、見捨てないでやつてな。」

「ホントよ、優梨。前野は大変よ。なにせ、勉強さつぱりなスポーツ＆バスケバカなんだから。」

「悪かつたな。」

私はクスクス笑い、

「まあね。それも覚悟の内よ。」

とイタズラっぽく笑つた。

「おいおい、優梨もかよ…」

ちょっと脱力気味なキミ。

でも、目が笑つてる。

「優梨、別の店いこ。」マイツラと一緒に口クに食えやしない。」

「好きな所に行きなさいよ。誰も引き止めないから。」

「へーへー。優梨、アイツりまつとこで行くぞ」

「有沢、頑張れよ」

「優梨、達者でね」

「ほつとけ。」

「じゃあね。また終りごろにね。」

キミと手をつなぐ。

手のひらの感触が、まだくすぐったいけど、心地良い。

前野良平…あつたかくて、優しくて、心地良い…ずっと一緒に居たいと思つキミの名前。

#IIIといつないだ、てのひら（後書き）

いかがでしたか？今日は文化祭の前編でした。次回は後編です。もし、感想等あれば教えて下さい それではまた！

キミとたのやわ

キミとつないだ手があつたかい。

キミとのこの時間がとても愛しい。

キミとの絆を確認して、幸せな気分。

「優梨、どこで食べる?」

「どこのでも良いよ。空いている所にしよう。」

「おー。」「おー。

こんな、何気ない会話が嬉しい。前は考えられなかつた事。

「あ、タマズ正在进行中。」

「んじゃ、ここにしようか。」

着いたのは1年生の模擬店。タマズ焼き屋だった。

「よし、一番多いのにするぞ。」「えつ……それって、12個入りの

?大丈夫かな…

「一人で半分づつだから6個ずつじゃん、余裕だろ」「

「え…大丈夫かな…」

「優梨は大丈夫だつて」

「優梨はつて…何よ…私そんなにたくさん食べないよ…」

「ま、余つたら俺がくつちやる。ちょっと待つてて。買って来るから

そう言つて、キミは屋台に走る。

ふと空を見上げた。

綺麗な秋晴れだ。

少しのびをした。

この時間が…いつまでも続いて欲しいと願つた。

「優梨つー買つてきたぞ!」

笑顔でキミがこっちに来る。

「ありがと。ごめんね…買いに行かせちゃつて…」

「んな事気にはすんなよ。それより、どこので食べようなあ……」

「別に、どこでも良いよ。あ、その階段にしそう。」

私が言つたのはコンクリート製の木陰にある階段だつた。でも階段数は3・4段ほどだつた。

「よいしょ。」 階段に腰掛ける。

ひんやりと冷たい。

「ほら、優梨。」

そう言つてキミはタコ焼きのパックを差し出す。

「んじゃあ、頂きます。」

「ほいほい。」

爪楊枝をタコ焼きにさした。以外に重い。

なぜか、キミは笑つてる。

タコ焼きを口に入れた。

「…。」

「どうだ? うまい?」

「…」

とても喋られる状況じゃない。

なぜ口の中に、大粒のタコがあるのか理解できなかつた。

…キミはやっぱりにやにやしてゐる。…やられた。

「もう、良平君…」のタコ焼き何?…

「何つて?」

キミのクスクス笑いは止まらない。

「タコ焼き! こんなおつきなタコが入つてるなんて聞いてないよー。」

「なんにも入つてないよりは良いだろ。」

私は少しふくれながら、

「…いじわる…」

と言つた。

キミは少し笑つて、

「ごめんごめん。でも、優梨はやっぱりかわいいな。」
と言つた。

みるみるうちに顔が熱くなる。
キミをみれない。

「……でも……食べる……」

そう言つて私が新しいタコ焼きに手を伸ばすと、キミは言つた。
「……なあ、『あーん』、して。」

「えつ？ 何それ…」

「だから、食べさせて。俺に。」

「ええつ！」

思つてもみなかつた。そんな光景は有り得ないと思つてた。

「い……嫌だよ……恥ずかしいよ……」

「いいじゃん。誰もみてないし、はい、あーん……」

そう言つてキミは口を開ける。

「しょ……しょーがないなあ……これじゃ、ホントに3歳児だよ……」

そう言いながらも、キミの口へタコを運ぶ。

「……ん……つまい！ 確かにタコでかいな。ははは。」

キミが笑う。こんなにも近くで。

次の瞬間、私はいきなり笑い出した。

「えつ？ なんだよ……ビーした？」

私は笑いを堪えながら、やつと言つた。

「……だつて……青ノリ……前歯に……付いて……んだもん……あ～、苦しい……」

「えつ……マジで？」

キミは急いで爪楊枝で青ノリを取つた。

「おい、もう青ノリ取れただろ。」

キミは『イー』と白い歯を見せる。

その仕草がおかしくて私はまた笑う。

「…なんだよ…優梨…笑いスギだよ…」

「いり…『めんじめん』

ようやく笑いが落ち着いた。

「なんかさ、良平君つて、いいなあ…って思つたんだ」「えつ?」「初めて話した日、巻貸してくれたじゃん、でもあれは

…」

「穴…開いてたな…」

「それと同じで、なんていうんだ…あつたかいつてこののかな…」

和むなあつて。」

「そ…そーゆーもんかな…」

「他の女の子は分からないよ。でも、私は良平君のそんなとこは、スキだよ。」

そう言ひとキミは、

「そおか?ま、優梨がスキでいてくれたり別に良いんだけどな。」

と、タコ焼きを頬張りながら言つた。

私ももう一つ食べた。

キミと並んで…キミの隣りで食べると、こつものタコ焼きが…ちよつと違つた。

最も、タコの大きさはいつもと比べるとかなり大きいけど。タコ焼きを食べ終えた頃、放送がかかつた。

『そろそろ、2田田の田程の終了時間です。生徒の皆さんは、後片付けにとりかかりましょう。職員は…』

「えつ…もうそんな時間か?…」

「…ホントだ…タコ焼き食べてたら終わっちゃつたよ…」

「集計係つて、この放送があつたら教室で売り上げ計算するんだよな?」

「うん。畠花莉と田辺君も一緒に…」

「あーあ…結局俺たちつて、少しケンカして、仲直りして、タコ焼き食べて終わりかあ…」

「いいじゃん。楽しかつたよ。」

「そうか？ 優梨がそう言つたら良いけど……」

「…良平君は？」

「えつ？」

「今日、楽しかつた？」

「勿論じゃん。優梨と一緒に樂しくない訳ないじゃんか。」
「そう言つてキミは、また笑つ。

キミの笑顔が眩しい。

「あのや、優梨。」

急にキミが眞面目な声で言つ。

「なあに？」

「いつかさ、ちゃんと…『トート』誘う。」

「うん。楽しみにしてる。」

「ああ、その時はもう少しジシッヒキメる様にする。」

「なんで？ そのまま良いよ。」

「えつ？」

「今日みたいに、リラックスした、そのままの良平君と、『トート』したい。」

「…そうなのか？」

「うん。肩の力抜いてさ、今日みたいな笑顔、もつと見せて。」

「…優梨つてやつぱり面白にヤッだよ。」

キミは笑う。

「なによ。私はね、2枚目のカツコつけより3枚目の人の方が好き
なのよ。」

「…もうなんだ。」

キミはやつぱり笑う。

「なつ…なによ…」

堪え切れなくて、私も笑う。

幸せな瞬間。

こんな瞬間…キミと一緒に…もっと味わいたい。

「…行こう。二人とも、待つてる。」

今度は、私が左手を差し出す。

キミはほほ笑んで、右手をつなぐ。

突き抜ける様な青い空に、今日は、背伸びしたら届く気がした。

「おっ、ラブラブカップルが帰ってきましたよ。」

「お～。どうだつた？」

教室に行くと、すでにみんな帰り、亜花莉と田辺君だけが残っていた。

「じめんね…遅くなっちゃって…」

「いいのよ。別に。ところで、どーだったのよ。前野と、どこ行ったの？」

「う～ん…タコ焼き食べたかな。それだけ。」

「はっ？ それだけ？ 他には？」

亜花莉の目が、真ん丸になる。

「…行つてないよ。」

「おやおや。あれからずつとタコ焼き食べてたの？ キミたち。」

呆れたような口調の田辺君。

「そーだよつ。悪いかつ。」

「…別に。ま、良いんじやない？」

「亜花莉たちは？どこか行つたの？」

「当たり前よ。ほとんどのクラス回つたわよ。」

「タコ焼き食べたけど… そんなに時間かけて食べたの？ 一つ食べるのに何十分かかるのさ。」

「別に良いだる。」

「まあ、部外者は口を挟まないけどね。」

「優梨、それで満足なの？」

「うん。勿論。なんで？」

「…ダメだこりや。」

亜花莉は呆れた様に溜め息。

「筋金入りのバカツプルだな。」

田辺君も溜め息。

「別に良いだる。また改めて別の口にアートするよ。」

「そーなんだ…」

亜花莉が、ニヤリと笑う。

「…なつ…何？亜花莉…」

「べえ～つにい～。あんたたちには敵いません。もづ、勝手にやつてて。」

「そーそー。一緒に居るとヤケドしちゃう。」

「なつ…」

キミは言葉に詰まる。

「はいはい、キミたちの話聞いてるとね、歯がぐらぐらするの。「そうそう。どうせ、その様子だとバザーに、顔すら出さなかつたんでしょ。だから最後の仕事ぐらにはきちんとやりなさい。」「はあ～い。」

私たちは、一人でそろって返事をした。

集計が終わつたのは、文化祭が終わつてから2時間後だった。

辺りは真っ暗。

「…優梨、送つてく。」

「えつ？だつて…反対方向じゅ…」

「いーんだよ。危ないし、もう少しで部活再開だから、今から足腰鍛え直さなきやな。」

「大変ねえ…遠距離恋愛は。」

「亜花莉…これは遠距離なの…？」

「逆方向も、立派な遠距離恋愛よ。」

「俺たちは、二人共東町だもんな。」

「だから中学も一緒なのよ。東中。」

「そなんだ…」

「ま、大切なのはさ、どこに住んでるかじやなくて、どれだけ好きか…って事じやん。」

どこか熱心な視線の田辺君。

「真章、お前、たまには良い事言つな。」

「キミは、感心した様な表情。

「悪かつたな。お前程言つの、たまにじやないぞ。」

「なんだと…」

「はいはい、ケンカはおしまい。ほら、真章、行こい。」

亜花莉の言葉で、私たちはお互に分かれた。

「じゃあね。」

「うん。また明日ね。」

「良平、ちゃんと有沢守つてやれよ。」

「当たり前だろ？」

…一人で並んで歩く。

空には、三日月。

「…三日月だねえ。」

「ほんとだ。満月じゃないのか…」

「良平君、満月が好き？」

「うーん…三日月も嫌いじゃないけど、『ひせな』田代のものを全部見たいじやん。」

「ふふふ。良平君はらしいね。」

「そう？」

「一人で笑いあう。」

「そう言ひえ、前にも送つてもらつたよね。」

「そうだな。あの時はまだ、付き合つてなかつたけど。」

「不思議だね。ホント、つっここの前だよ。」

「ホントだな。…あ、あれじやないか？」

家の前に着いた。

「送つてくれてありがとう。気をつけて帰つてね。」

「おう。今日は楽しかった。ありがとな。」

「私もだよ。…デート、改めて楽しみにしてる。」

「ああ。俺も楽しみ。」

「そうだね。…それじゃあ…また明日…」

「おっ！んじやなー！」

キミはランニングをするかの様に、軽やかに走つて行つた。
少し夜風が冷たい。

なんだか、新婚カップルの気持ちが分かつた様な気がした一日だ
つた。

笑うと白い歯が見えるキミ。

たくさんのお宝をくれるキミ。

…前野良平。幸せな瞬間をくれるキミの名前。

#IIといたりやせ（後書き）

今回は、いつも以上に甘々にしてみました。目標は新婚カップル
(笑)
感想やメッセージ等、あれば是非下さい。そして、よろしければ
評価もして下さると嬉しいです。
次回は新展開を考えています。もし機会があれば見てやって下さい

キミのとなりにいてもいい?

キミと話をする。

キミの笑顔を見る。

キミの泣き顔を見る。

キミと一緒にいる事を夢見て…願つて…やつと叶つた。これからもよろしくね。

「優梨!」

朝一番。キミの声。

急に幸せになれる、大好きな声。

「おはよー。良平くん！」

「あのわあ…デートの事なんだけど…」

キミは少しうつむき加減で言つ。

私もまじまじと見れないけど、多分同じ。顔は真っ赤。

「うん…」

「今週の…土曜日にしないか? その日…あゅうじ部活休みで…」
「土曜日? 大丈夫だよ。」

「ホントか?」

キミは、せつときは正反対。嬉しそうに私の顔を覗き込む。

「うん。土曜日、デートしよう。どこで何時にする?」

「実はや、アネキが遊園地のタダ券くれたんだ。」

「お姉さん? 良平君、お姉さんいたんだ…」

「といつてもとっくに成人してるけどな。んで、そのアネキが彼氏と遊園地に行く予定だつたけど、彼氏の方が急に入院したんだよ。」

「ええつ! 入院? 大丈夫なの?」

「軽い盲腸だつて。でも、有効期限までに退院できそうにないからくれたんだ。」

「そりなんだ。私、遊園地スキだよ。」「よつしゃ、んじや土曜日に10時。迎えに行くよ」

「遊園地か……懐かしいなあ……」

「そんなに行つてないのか?」

「うん。中2が最後だつたから……3年くらいかな。」

「優梨つてさ、絶叫系苦手だろ。」

「えつ……どうして分かるの?」

「優梨つて怖がりっぽいかなつて。正解?」

「うん……当たり……行くと絶対乗らないんだ……観覧車とかは乗るけど……」

「そつか……実はさ……俺も苦手でや……」

「ええ? !」

「なんだか意外……つつきりキミは大好きかと思つてた……。」

「……なんだよ……俺にだつて苦手な物の一つや二つはあるんだよ。」

「そうなんだ……いや、なんか意外で……」

「なんかさ、あーゆーのつて、心臓に悪いって」

キミは少し言い訳。

私はちょっと笑つ。

「そうだね。乗る前の案内では、心臓の悪い人は乗らないでつてアナウンスあるけど、心臓に悪いなら作るなつて思わない?」

「あ、それ、同感!……やっぱ、優梨は面白いよ。」

「だからさ、それ、誓めて無いよ。」

「なんですよ? ベタボメの間違いじゃない?」

「失礼な……」

そう言って私たちは笑つ。

同じ話題で、同じ話で、同じ理由で笑いあつ……これつて、凄い事だよね。

大好き。やっぱりキミが彼氏でホントに良かつたよ。もし、切ない思いを『恋』というなり、キミを愛したこと頃つこの気持ちが『愛』だね。最近、実感するんだ。

「よつし、んじゅ士曜なつ……」

「うん。楽しみにしてる。」

「おうひ。可愛いカツ」「してここよ。」

「何よ。今で十分じゃない?」

私は冗談っぽい笑顔で言った。

でもキミは、眞面目な顔で言った。

「うん。ホントにそうだな。」

一瞬言葉の意味が理解できなかつた。

そして、私は顔が赤くなる。

「…そんな…冗談だよ。ちゃんとキレイにして行くよ。」

するとキミはいつものおどけた顔で、

「俺、セクシーなのよりキュートな方が好きだぞ。」

と言つた。

「なにそれ…まあ、参考にするよ。」

と、私もまた冗談めいた言葉。

「ははは。んじゃ、期待しないでまつとくよ。」

…そう言つてキミは去つて行つた。

キミの去つていぐ背中を見つめる。

ちょっと脱力。

キミの前で、緊張してゐ訳じやない。

でも…きっと誰でもあんな事言われたらドキドキするよ。

「…じわる。」

キミの態度が無意識でも…計算していたとしても…それは同じ事。

キミはいつも私の心臓の鼓動を焦らしてばかり…

キミを思つだけで、ほうり、また顔が赤くなるでしょ。

『セクシーなのよりキュートな方が好きだぞ』

…キューーートねえ…

私にはそんな要素無いんだけど?

アイドルみたいに可愛くないし、スタイルも良くなじよ…。

メイクもほとんどしない。服だつて特にこだわりはないよ。

「ふう…」

小さな溜め息一つ…

「ええっ？なんですかってえ？」

「もう、亜花莉…そんなに大きな声出さないでうてば。」

「だつて、あんたねえ…」

今はお弁当時間。亜花莉と机をくつつけて食べる。

「初デートたら、一大事じゃない。」

「…だから聞いてるんじやん…亜花莉はどうだったのよ。」

「…ウチらねえ…」

亜花莉の顔つきが変わる。

その顔は前に見た、満たされた…遠くを見つめる様な顔だった。

「ウチらの初デートは夏祭りだったわよ」「夏祭り？」

「そ。私ら付き合つてまだ3日でわー。まだお互いを名前で呼ぶのも恥ずかしかったのよ。」

「ふうん…そんな時あつたんだあ…」

「当たり前よ。それでさ、私浴衣着ていつたのよ。でも…真章…何

も言つてくれなかつた…」

「何も？可愛い…とか…いつもと違うじやん…とかも？」

「そ。言わなかつたのよ。こつちは結構頑張つて着付けたり準備したりしたのにね。」

そう言つて亜花莉は苦笑い。

「ただでさえ付き合いはじめで会話もなかなか無かつたのにわ、話のタネにでもならないかなつて浴衣着たのに…」

「意外だな…田辺君つてずっと話してるとと思つてた…」

「それは私も。友達の時はそうだったのに、恋人になつたら急に態度変わつちゃつて…」

「そなんだ…」

「でね、祭りもそんなんじやあんまり楽しくなくつて、真章がたまたま友達と会つて話し込んだから私、人の少ない静かな所に行つたの。」

「えつ…田辺君に言わないで?」

「そ。無意識に見つけてもらいたかったのかな…とにかく一人で涼

んでたの。」

「そうかあ……」

スキな人が居て、結ばれて、楽しい時間を過ごすハズだったのに
…私だけ置いてけぼりにされたら…

…私なら…きっと耐えられないよ…

「でもね、そうしてるうちにだんだん空しくなってきたの。私は何
を怒ってるんだろうって。真章は悪くない。きっと私だって近くに
友達がいれば話だしちゃうな…つて。」

「そつか…」

「それでね、帰ろうと思つて歩き出したら、いきなり物音がしたの。

「えつ…」

「近くにはいないハズだし建物もないから怖くなつて走り出した
ら、いきなり声がしたの。真章の声で、『亜花莉！…』つて。」

「田辺君が…」

「息は切れてるし汗だくだし…こっちが『大丈夫？』つて言つたら、
なんて言つたと思う？『茧じやないんだから飛んで行くなよ。』つ
て言つたの。」

「ふふふ。田辺君らしい。」

「まあね。それで、『ごめんね』つて言つたら『茧は綺麗に光るだ
けど、亜花莉は光らなくても綺麗だよ。』つて言つてくれた…」

「すごい…なんかドラマみたい…」

「それでね、話しなかつたのはどこの見て話していいか分からなかつ
たからなんだつて。」

亜花莉は嬉しそうに話す。

「ま、その後はあんたも知つてるとおりのラブラブカップルになり
ましたよー」

「そうだつたんだ…なんか良い話。」

「でしょー。」

亜花莉は嬉しそう。

「ま、そーゆー訳で、初デートって大切なのよ。」

「…うん…」

分かつてゐる。それは。

「…でも、私…可愛くなんてないから…せめて…」

「…せめて?」

キミの隣りにいて…恥ずかしくない彼女になりたい。

つづむく私に、亜花莉は私の気持ちが分かつたかのように話かけた。

「…デートはいつ?」

「えつ…今週の土曜…」

「何時?」

「10時に迎えに来るつて。でも…なんで?」

「土曜の8時に、私の家に来なさい。『デートに行く格好でよ。』

「えつ…なんで…?」

「とにかくよ。ぜえ~つた~よつ~!」

「うん…」

その日はそれで終わつた。

それから、キミの事…キミとの、デートの事を考へていたら…あつと言ひ間に土曜になつてた。

土曜日・午前7時57分・亜花莉の家の前。

思えば亜花莉の家にはそんなに来た事は無かつたな…

ピンポーン…と家のチャイムを鳴らす。

遠くの方で、ドアに近付く足音が聞こえる。それも、かなり早々と…

バンッ…!と勢い良くドアが開いた。

「おはようつ!優梨!…!」

息を切らしながら亜花莉がやつて來た。「おはよう…でも…どうしていきなり?」

「良いから早く入つて!」

「うん…お邪魔します…」

そう言つて私は亜花莉の家に入り、2階の亜花莉の部屋に行つた。部屋に入ると、亜花莉のお姉さん・光里さんひかりがいた。

「優梨ちゃん。久しぶりつ。いらっしゃい！」

「あ、光里さん。お邪魔します。」

そう言いながら光里さんを見る。

光里さんは亜花莉と5年が離れていて、今は短大を卒業して化粧品店に勤めている。

とても綺麗で大人っぽい。亜花莉の大人っぽさは、多分光里さんの影響だ。

「さつ、早速始めましょつか。」

…えつ？

「さ、優梨、ここに座つて。」

…ええつ…

「あの…一体…何？」

私は亜花莉と光里さんを交互に見比べた。

…なんか変な予感。

「優梨ちゃん、今日、初デートなんですつてね。」

「え…まあ…」

「優梨、なあんにもしなくても十分可愛いんだけど、もつと可愛くして前野とベストカツプルにしてあげる。」

…変に楽しそうな一人。…もしや…

「あの…もしかして…マイクとか？」

「それだけじゃなくてファッショントかヘアスタイルとかもよ。」

光里さんがいたずらつぽくウインク。

「んじや、優梨ちゃん、じつとしててね。」

それから、しばらくして、光里さんの手が止まった。

「さつ、できたわよ。優梨ちゃんつ！鏡みてみて。」

光里さんから手鏡を受け取る。

「どうしてだね？ 每日見てくるはずの自分の顔が…

「…」れ…私？」

「別人みたい…」

「可愛いって、絶対……さすがお姉ちゃんつ。」

「ま、優梨ちゃんはアンタと違つて元がいいのよん。」

「なによそれえ…優梨、どう？」

「…違う人みたい…」

いつもの私は髪は下の方で2つに結んでいて、顔もしているのは洗顔ぐらい。でも、鏡に写る私はパツチリとした瞳、キレイに塗られたファンデーション、可愛いピンクのチーク、グロスを塗った唇、ふわふわした髪…

…私は良平君の隣りが似合つ彼女になれたのかな？

「…私…可愛くなれた？」

「うん。すつゝべ。前野にはもつたいたい。私がデートしたいぐら

いよ。」

「ホント…？」

「ホント……もつと自信持ちなさいよ…」

「そうよ、優梨ちゃん。」

光里さんが優しいまなざしで私を見る。

「ウチの店に来るお客様は、みんなキレイだし十分そのままでも可愛いのに、自分に自信が持てないの。」

「自信？」

「そう。今の優梨ちゃんみたいにね。」

光里さんはほほ笑む。

「私の仕事は、そんな照れ屋さんの背中を、メイクをすることできっと押してあげる事なのよ。」

「…後押し？」

「そう。だから、みんなそのままで十分可愛いんだから、化粧をやり過ぎるとダメよ。自分に相応しい最小限のメイクをして、自分に自信をつけなければそれでいいの。」

「…光里さん…」

「でも、自信が有り過ぎるのも考え方だけね」

光里さんはウインク。

「そ。だから優梨も、自信持つてデートして来なさい。」「ありがとう、光里さん、亜花莉。」

9時57分。

ピンポーン

私の家のチャイムが鳴る。

私はベッドの上に置いたバックを取り、玄関へ行く。

『すいませーん、優梨さん、いますかあ?』

外から聞こえる、キミの声。

私はドアを握る。

これから始まる、キミと私の時間。

前野良平…せっかちで、ちょっと短気で子どもっぽいけど…憎めない…それがかえって愛しい、キミの名前。

#IIのとなりにしてもいい?（後書き）

今回は新キャラ・光里が登場しました　おまけに亜花莉と真章の初デート秘話?も書いてみました

次回は、とうとう私も待ちに待つてたデート編　どんな話にするか
考え中ですが、できる限りラブレターブラブにしたいです

それでは、感想&評価、あれば是非下さいー。（かなり嬉しいです！）感想等くださいました皆さん、ありがとうございました。心から感謝します！それでは…

ガチャヤツ…

キミがドアの前に立っていた。

「良平君… おはよう。」

… 10時前だけね。

「ゆ… 優梨… ? だよな。」

… えうだよ。 … ピックリした?」

キミの顔が紅潮する。そして咳く様に、キミは一言告げた。

「… 可愛い…」

『可愛い』… その言葉、私に言つてくれているんだよね。

「ホント… ?」

「言つただろ。」

キミはそういうながらポンッと私の頭に軽く手を置く。「俺、キートなのが好きだよ。」

「うん。ありがとう。」

優しいね、キミは。

「ほり、優梨。」

キミは手を差し出す。

「うんっ。」

私はそっと手を重ねる。

やつぱりキミの手はあつたかい。緊張がほぐれてゆく。

「今日さ、これからバスで行くから。直通の便があるんだって。」

「そつなんだ。乗った事あるの?」

「いや、無いよ。アネキに聞いた。」「そつか。でもなんか悪いな

あ… ホントは彼氏と行くんだつたんでしょう?」

「ま、大丈夫だよ。彼氏もだいぶ良いみたいだし。」

「そう?」

「何? ずっと気にしてたのか?」

「うん…ちょっと…」

「優梨つて、優しいな。」

「そり?」

「優しい…それは、キミもだよ。」

「あ、優梨の『ゆ』は、優しいの『優』だな。なんか、良いな。」

「…そう? 良平くんは…イイ感じで平らで『良平』?」

「はははっ。なんだよそれ。イイ感じねえ…あー、おもしれえ。」

「…んもう、冗談だよ…笑いスキ…」

ちよつと顔を背ける。

「キミがあんまりにも笑つから…まともに顔合わせられないじやん。あー、優梨、『めんよ。』でもあんまりにもオモシロすぎで…」

「…もう…」

膨れつ面になつてみる。キミはちよつと慌てる。

「怒るなよ…あ、ほら、バス停着いたぞ。」

私の家からそんなに離れていないバス停。

でも、キミと一緒に居たらいつもより近くに感じる。

「バス…何時?」

「あ、ちよつと待つてろよ。確かに時刻表があつて、持つて来た

から…」

キミはカバンを『じかん』を探る。中からはちよつとクシャクシャになつた時刻表。

「あ、10時20分つてのがあるよ。今何時?」

「今17分。」

「んじゃあと3分だな。」

「あれつ?」

「あのさ、良平君…」

「うん?」

「 いじか、 11時30分つてあるんだけど？」

私はバス停に貼つてある時刻表を指差す。

「ええっ！んなハズは…」

キミは時刻表をもう一回確かめる。

「あ～っ！！！」

「きなりキミが大声をあげた。

「…どうしたの？」

「これ…今年の春までの時刻表だった…」

ちなみに、今は季節は秋。約半年前の時刻表。

「あはははっ！」

今度は私が笑う番だよ。

「しょーがないだろつ。朝、緊張してたし…焦つてたんだよつ

また赤くなる、キミのほっぺ。

「…なんか、良平君らしげ…」

傘もそうだったよね。

「あ～、俺つてなんでちゃんと最後まで決められないんだよ…」

キミははくしゃつと髪をかき上げる。

そして、がっくり肩を落とす。

その姿があまりにも惨めに思えて、私は笑うのを止めた。

「はあ～…」

待ち合席のイスに深く座り込んで大きな溜め息をはく、キミ。

私はそつと、キミの隣りに座る。

「あの方、笑つて」めん。良平君も、緊張したんだよね…」「当た
り前だろつ。初デートなんだし…」

「そうだね…文化祭もデートつてカタチじゃ無かつたしね。

「…それもあるけど…」

キミは言葉を詰まらせる。

「デートってモノ自体が、初めてなんだ。」「えつ？」

「… そうなの？」

「恥ずかしいけど…」

キミは、またうつむく。

「… 恥ずかしくないよ。」

「えっ？」

「だつて、私も同じだもん。」

キミは、ちょっと意外そうな顔。私は、勢い良くイスから立ち上がる。

「ホラ、こいつ。一時間、時間潰せなきゃ。その辺に喫茶店かなにかかるよ。」

「… 優梨…」

「もう、私は気にして無いからっ！ ねつ？」

さう言つて私は手を差し出す。

さつきと逆だね。

「… やつぱ、優梨の『ゆ』は優しいの『優』だな。」

さう言つてキミは立ち上がる。そして私の手を握る。私の手よつ、一回じぐりに大きな手。

あつたかい手。

「うへん… どうするかなあ…」

「次が1時30分でしょ？ 5分前にバス停に行くとして… 1時間弱あるねえ…」

「うへん…」

「とりあえずや、ワインドウショッピングでも…」

「お、いいな。さつすが。んじゃこの辺の店、見て回るか。」

「うん。」

バス停の近くにはたくさんのお店がある。

「あ…」

私は雑貨屋さんの前で足を止めた。

「可愛い…」

ペアリングだった。きつと一人で付けたら…

「…欲しい？」

キミは私の顔をのぞき込む。

「えつ、いや、別につ。」

私は慌てて反対を向く。

いきなり顔近付けるなんて…ビックリするよ。
「あのさ、欲しいなら、ちゃんと言つてみろよ。」

「…。」

「欲しい？」

「…うん。…んじゃ、ワリカンで聞く…」

振り向いた。

キミは財布をカバンからソジソジと取り出して、さつとレジに並んだ。「…ワリカンで良いのに…」

ボソッと呟く。

キミが支払いを済ませた。

「はい、優梨。」

キミは指輪の入った紙袋を差し出す。

「…ねえ、ワリカン…」

「しなくていいの。ホラ、俺、金持ちだからね。」

キミはおどけた顔。

「…ホントに…良いの…？…なんか悪い…」

「そう?」「…

しばらくこっちを見る、キミ。

「なあ、ちょっと喉渴かない?」

おつ?

「よしつ、んじゃジュースおごる。ワリカンにならないけど…」

「いいの。ほれ、行くぞ。指輪ちょうどいい。」

キミに私のよりも少し大きな指輪を渡す。

「おつ、なかなかカッコいいじゃん。」

「そう?へへつ、センスいいでしょ?」

「おう。あ、あそこに公園あるんだ。」

「ホントだ。自販機もあるし… あそこに行こつか?」

ここも近所。小学生の頃、ぐらいまではよく遊んだな…

私とキミは、噴水の側のベンチに腰掛けた。

「じゃあ、ジュース買って来る。」

「おう。俺、サイダー系が良い。」

「了解っ!!」

ぽかぽかと晴れた空。まさに運動会日和。

自販機の前に来た。

「サイダー系ないな…」

みんなジースぱかり。

「いくらなんでもあるでしょ…」

とりあえず辺りを見回す。

…無さそう。

「どうするかなあ…」

もう少し探してみると…

…すると、遠くで子どもの声がある。

『お母さん～ジュース買ってえ～』

『はいはい。』

…あっちの方にあるのかな…

私は声のする方へ行く事にした。

ちょっと歩いた所に、自販機が見えた。

…あるかもしれない。

自販機を見てみる。

「…あつた…」

ラムネの缶ジュース。

私も同じものを買つ。

気付けば、随分遠くに来た。キミは心配しているかも…

私は2本の缶ジュースを抱えて少し小走りでキミの所へむかう。ベンチが見えた。

キミの姿も見える。

私の進むスピードも無意識に早くなる。

「ごめんね、遅くなつて……」

私は息を切らしながらキミの顔をかける。

……キミから返事がない……

……怒つたのかな?

「良平……君?」「

キミの顔をのぞき込む。

……キミは……

「ねつ……寝てる……」「

心地良さそうに寝てる。

「……おいおい……」「

私は隣りに座る。

……結構焦つて買つてきたんだけどねえ……

「ふう……」「

小さく溜め息。

ま、いつか。ほかぽかしてるし、遅くなつたのも私が悪いにし……キミの横顔を見ていると……いつまで眠くなつてきた……

「おい、優梨！優梨！……」

私は、キミの声で目を覚ました。

「ん……良平君？……あ、私、寝てた？」

「それより、時計見てみろ。」「

……えつ？なんか嫌な予感……

「12時……4分……」

やつちやつた……

「……バス、行つちやつたぞ。」「

「……もう……無かつたつけ……？」

「……無い。」「

……マジっすか……

「……『ごめん、俺が完全に悪い。寝ちまつたし……』

キミは決まり悪そづつづつむく。

「…そんな…私も…ジュース買いに行くの…遅くなつたし…」

「いや…つていうか、ジュース何処まで買ひに行つてたんだ？確かに来る途中にあつたぞ。」

…それは…

「「めんね…反対まで行つてた…」

「えつ？」

「…そここの自販機、サイダー無かつたかい…」

キミはその言葉に驚いた。

「じゃあ…サイダー系無かつたから、反対の自販機まで買ひに行つてたのか…？」

「…うん…」

「他のこじみつ…とか、買つて来ない…とかは…考えなかつたのか…？」

「…うん…「めん。」

怒つた？

呆れた？

…、「めんね…不器用で…

でも、キミは笑いだした。

「はははははっ…」

私はビックリ。

「優梨つて、本つ当に良じヤツだよ。参つた。」

そう言つてキミは、私の頭にポンッと手をのせる。

「…笑わなくとも…」

「いやいや。ホント参つた。せつぱり、優梨、可憐い。おまけに良いヤツだよ。」

…面白いより…かなり良い評価ぢやない？

「…ありがと…」

キミはまだクスクス笑う。

「あーあ。ビールするかなあ……何しようなあ……」

「なんでもいいよ。あー…ジューース…ぬるくなったりやった…」

「いいよ。家で冷やして飲む。」

「そだね。…それじゃあとりあえず「せんべん食べよっか。」

「一人とも立ち上がる。

自然と手を繋ぐ。

「…あ…」

キミは何か見つけて立ち止まる。

「ちょっと待つてろよ。」

キミは走り切って行つた。

…どうしたのかな？

しばらくすると、キミが戻つて來た。手には白いパックを二つ持つてゐる。

「あつちの方で見つけたから…」

そう言ってキミは私にパックを差し出した。

ほのかにソースの香ばしい匂い。…もしかして…

「たこ焼き？」

「あつたりー。なんかさ、文化祭思いださない？」

「ホントだねー。」

…覚えてくれてたんだね。ありがとう。

「でもさ、買つてきたのはいいけど、何処で食べよっかなあ…」

「…へん…」

キミは辺りを見回す。私は考へる。

その時、一つひらめいた。

「ねえ、私、良い所知ってるー。」

「マジで？行こう。」

やつて來たのは小高い丘。ウチの近所で、ピクニックに來た事があつた。

「お~。イイ感じじゃん？わっすが。」

「まあね。ダテに住んでないよん。わ、座つて食べよっ。」

「おう。」

パックを開ける。

ソースの匂いがどこか懐かしい。
キミはたこ焼きを一つ、頬張る。

「ん～んまいなつ！」

「ホントだね。おいしいー！」

「だろっ。ナイスチョイスだな。さつすが俺ー」「……それ、自分で
言つて？」

私は少し笑いながら言つ。

「だあ～つて、優梨、言つてくれるので？」

「ナイスチョイス。」

私は感情のこもつて無い声で言つ。

「おいおい。もうちょっと感謝してくれよー」

「冗談だよ。ホントにおいしい。ありがとー。」

「うん。なら、良い。ま、焼いたのはたこ焼き屋のおひやんだけ
どね。」

キミは白い歯を見せて笑う。

「おひ、今日は青ノリ付いてないね。」

「そんないしょっちゅう付けてないよーだ。」

キミは少しうてたような顔。

「…ふふふふ。」

「ははは。」

私たちちは笑う。

幸せな時間。

やわらかな風が丘の上をやさしく吹き抜ける。
秋晴れの空、澄みきった空、穏やかな時間…

「う～ん、食つた食つた！」

キミはそういう言いながら腕をあげてのびをする。

「うん。おいしかったね。」ちそこいつわま。」

「

私も食べ終えた。

目の前に広がる景色を、しばらく私たちほ眺めた。のんびりとした時間。

「のどかだねえ…」

「なんだよ、年寄りくさいなあ… 優梨…」

「悪かつたね…」

「別につ。可愛いから許すつ。」

「何、ソレ…」

「ところでさ、マイク、誰にしてもらひたわけ?」

急に話題が変わる。

「えつ…」

「北里?」

「…うん。…分かつた…?」

「なんとなく…」

「正確には…亜花莉とお姉さんの光里さんが、マイクしてくれたんだよ。」

「光里さん?」

「うん。短大を卒業したばっかりの若くてキレイな人。今は化粧品店で働いてる。」

「へえ…。」

キミは優しい、あたたかいまなざしで私を見ている。

「二人とも、私に自信を持たせてくれたの。」

「そつか。だつて、可愛くなつたよ。優梨。」

「…ありがとう。」

そう言つて私はキミの肩へもたれた。

キミは私の肩を抱く。

「でもさ、優梨が可愛くなりすぎると、俺のハードルが上がるんだよなあ…」

「えつ? ハードル?」

「そつ。彼女が可愛すぎる」とフレッシャーがねつ。「

「……だつて……良平君は……何もしなくてカツ『良いじやん。』

「えつ？」

キミは意外な顔。

「……だつて……良平君は……カツ『コいいから女の子から人気あるし……私、良平君の隣りが似合つ彼女になりたかったの。』

……正直な気持ち。

でも、キミは意外な言葉をかける。

「……バカだなあ……」

「えつ？」

「……隣りが似合わないのは俺の方だよ……優梨、可愛いじやん。』

「……可愛くない。』

「……可愛い。』

……キリなさそう。

「あー、もう、』

私はキミを見る。

「ならさつ、似合わないモノ同士のカツ・フルつて事でつ。』

「……ふつ……何ムキになつてんだよ。』

「なつてないよ。……いじわる。』

私はちよつとふくれてみる。

キミは私を見る。

「あー、もう今田は優梨ちゃんにやられっぱなしですねえ。』

キミはびりん、と横になる。

「俺なんてさ、昨日寝る前にいろいろ考えて、結局寝坊して……慌て

たらこの有様。』

「いーのつ。それで。良平君つぽい。』

「マジで？俺つぽい？そりや良かつた。』

「もう、立ち直り早いよ。』

「いーのつ。それが取り柄だもん。』

「そうだね。』

私も横になつてみる。

田の前には空がどこまでも広がる。

「…なんか…気持ちいい。風とか空とか。」

「そりだな…あ、折角だから腕まくらしてあげよっか?」

腕まくら?

私は勢い良く体を起こす。

「けつ…結構ですっ!」

キミも起き上がる。

そして笑う。

「動搖しちゃって~。可愛いね。」

「きょっ…今日は可愛い言い過ぎ…」

…顔が熱いよ。

「だーって、可愛いんだもん。優梨。」

キミはいっぱいの笑顔でこっちを見る。

…反則だよ…

「…もう…」

「…あのさ、」

キミは私に向き直る。田がさつきより真剣になつてゐる。

「ズバリ、今日のテートは100点満点中何点?」

「えつ…そりゃあ…」

ちょっとと考えて私は笑顔で答えた。

「もちろん、200点…」

キミは笑う。

「はははっ。100点満点って言つただる。」

「いーの。100点プラス。マイナスヨリイーでしょ。」

私も笑う。

二人で笑う。

私たちの笑い声が、秋晴れの空に、響き合ひ。

楽しかったよ。

ありがとう。

「…それじゃ、俺はここで…」

口々は、私の家の前。辺りは随分暗くなつた。日が落ちるのが早い。

「うん。今日は楽しかつた。ありがとう。」

キミはほほ笑んで、

「おう。じゃあ…月曜な。」

「うん。気をつけてね。」

「ああ。」

…キミは帰つて行く。

…ねえ、

今日は…羽田を外しても…良いよね…？

「…良平君っ！」

キミを呼び止めた。

振り向くキミ。

「今日はありがと。」

そう言つて私はキミのほっぺに背伸びした。
そして、私は何もなかつたかの様に笑顔で
「また月曜ねっ！」

と言つて家の方へちょっと早足で歩き出した。
多分キミは赤い顔してるだろ? な。私だつて自分の大胆さにちょっとビックリ。

でもこんな私もいて良いよね。

肝心の所で失敗するキミ。以外と照れ屋なキミ。

前野良平…私の彼氏。大好きな人。

キミと初デート（後書き）

9話を書いてからすぐに書いてみました。デートは、一人らしいものになつたと思います。

次回は、今のところ真章の事が書きたいので、そんな内容になると思います。

最後になりましたが、感想やメッセージ、アドバイスなど、本当に嬉しい限りです。この場を借りてお礼をいいます。

それではこの辺で。また11話でお会いできる事を祈つて…

キミとケンカ

キミとトーントした。

予定通りにいかなかつたけど、キミと私の距離が、前より近付いた気がする。

ありがとう。

「それで？結局タダ券は使わなかつたの？」

少し呆れ気味の亜花莉。

「…うん。…でもお姉さんの彼氏、治つたから始めの予定通り一人で行つたんだって。」

少し決まり悪そうに言ひ私。

「まあ、いいんじやない？あんたららしきよ。」

そうやつて、亜花莉は私の肩を軽く叩く。

「うん。」

私は照れる。

話題を変えよう。

「ところで、亜花莉と田辺君は？最近どう？？」

いつもの軽いノリで聞いたのに、亜花莉の顔が強張つた。

「…今私ら…ケンカ中なんだよね…」

困つた様な顔をする亜花莉。

「ケンカ？！どうして？」

私は驚く。

亜花莉と田辺君は有名な長持ち＆ラブラブカップルで、中学生の頃から付き合つている。

私は田辺君と付き合う前から亜花莉と友達だけど、今まで一度も

ケンカの話なんて聞いた事がない。

「倦怠期つてヤツ？なんかお互いギクシャクしちゃつて…」

「…倦怠期…」

「付き合いが長いと必ずあるのよ。逆に今まで無かったのが不思議なくらいよ。」

「… そうなのかなあ…」

私はうつむく。

倦怠期… キミと私にも… 起こる日が来るのかな…
「でもさ、別れる訳じゃないんでしょ？」

私は少し必死な顔で聞いた。

「どうかな…」

遠い目をする亜花莉。

「… つていうかいつからなのよ？ 倦怠期つて…」

「あんたらがたこ焼き食べてる頃。」

「土曜日に？」

「そう。電話してたら…」

「電話…」

「始めはいつも調子だったの。でも… だんだんお互い口調が厳しくなつて…」

「なんの話題？」

「… 部活。」

「部活？ サッカー？」

田辺君はサッカー部に入っている。3年が引退してからはキャプテンをしている。

「そう… なんか最近、1年と上手くいかないらしくて… 疲れてるみたいだから『たまには気を抜いたら？』って言つたのよ。」

「うん。別に問題は…」

「でも、それがいけなかつたみたいで『今は大事な時だから気なんか抜いてられるか！』って怒りだして…」

「それで？」

「こっちも心配して言つたのにそんな言われ方されたら腹立つて『あなたがピリピリしてるからみんなついて来ないんじゃないの？』って言つちゃったのよ…」

「あーあ…」

「それで電話は終了。メールも電話もないの。」

「…なんだ…」

私はふと田辺君を見た。

先週私に笑いかけた田辺君じゃなく、イライラした表情。キミが様子を伺う様に話をしている。

でも、田辺君は頗る程度で会話らしく会話は見られない。「私…いけない事…言つたのかな…」

しゅんと肩を落とす亜花莉。

「きっと、田辺君は神経質になつてゐるだけだよ。地区予選近いって良平君も言つてたし…」

「…はあ…」

深い溜め息をつく亜花莉。

こんなに落ち込む亜花莉は見た事ないかもしない。

いつも太陽みたいに明るくて元気な女の子…それが亜花莉…

「それは北里がまずかつたかもな。」

帰り道、キミと並んでいる。

最近の私たちはこうしているのが普通。

私はキミの部活が終わるまで待つていて、一緒に帰つている。

「そう…なのかな…確かに言い過ぎだとは思つけど…」

「真章さ、最近後輩と仲悪いんだ。一年、血口主張が強い奴等ばかりなんだつて。」

「…そつか…田辺君、キャプテンだもんね…」

キャプテンという重圧…そんな時は彼女との電話にも神経質になるのかな…

「そう。チームがそんな時でもアイツなりに頑張つてゐるんだよ。」

「…でも…だから力抜いたらつていうのは良いんじゃない?」

「それじゃあさ、」

キミは私を振り返つて真剣な顔になる。

「自分は死ぬほど頑張って気をはりつめてるのに、簡単に”氣を抜いたら？”とか言われたら、優梨はどう思ひへ。」

「…それは…」

きつと怒る。

「…そうか…田辺君は亜花莉にやつあたりしちゃつたんだね…でも…」

「でもさ、それって分かりにくこよ…」

「まあな。男ってのはそんなもんだよ。みんな無器用なんだ。」

「…うん…そうだね。良平君ってその典型的なカソジだもんね。」

「え、つ…なんだよそれ…！」

キミはギョッとした顔。

「べえつにっ。あ、家に着いちゃつた…」

「…なんだ…早いの…。」

「…それじゃあ…な。」

「うん。送つてくれてありがとう。」

そう言つと、キミは微笑んで帰つていぐ。

「…男の子つて…意外と複雑なんだな…。」

ちょっとだけ、キミが分からなくなつた気がした。

次の日、亜花莉は、まだ田辺君と仲直りしていないようだった。

「なんかさ、お互いギクシャクしたままなんだよね。」

亜花莉は苦笑する。

「真章に、話しかけられなーのよ。やつこつ雰囲気になつちやつて

…」

「そつか…。」

「うつむく私達。なんて声をかけて良いの?」

「でもさ、なんか拍子抜けしてるんだ…」

「えつ？」

「ケンカする前はいつも一緒にいたんだよ。でも今はそれがウソみたい…そんなものだつたのかつて。」

「…それは違うんじゃない?」

「えつ……」

突然の私の言葉にとまどいつ様子の亜花莉。

「田辺君ってさ、大人っぽいけど意外と頑固なんだよ。だから自分の方から謝るのが苦手なんだよ、きっと。」

「… そうなのかな…」

「うん。だから本心では寂しいと思つてるんじゃない?」

「… そうか… そうだね…。ありがとう。」

亜花莉が、私に微笑む。

いつもの亜花莉の笑顔。

なんだか私まで嬉しくなる、笑顔。

放課後、いつものように体育館の一階にある観客席に座つてキミを見る。

わたし=キミの彼女という事は、なんとなく広まって、私が体育馆にいることもいつもの光景になつていた。

そんな時、不意に声を掛けられた。

「あなた、有沢優梨さんよね?」

声の主はバスケ部の女子マネ・坂下麗先輩だった。

彼女は学校でも1、2を争う美女で、男女共にファンが多い。

「… はい、そうですが。」

「… 隣、座るわね。」

「あ、はい。」

そう言うと先輩は私の隣へ腰を下ろした。

隣に座つた先輩は、こっちを見ないでバスケ部の練習を眺めている。

すらりとして背が高い先輩。でも横顔もすごく絵になる。

「あなた、良平の彼女なんですか?」

『良平』…呼び捨て?

「… そうですけど…それが何か?」

少し怪訝そうに返す。

「あ、呼び捨て、気にしてるの?ウチの部つて男女関係無く呼び捨

てで呼んでるだけだから気にしないで。」

明るく笑顔で返す先輩。……よまれてた……。

「別に……それより何か？」

「別に大した事じゃないけど、ただ、気になつてね。」「
気になる？何を？

「良平、前から言つてたのよねえ。好きな女の子がいるって。」「

「… そうなんですか。」

本当にそれだけ？興味本意？

「ただね、意外と普通の子だなあつて。」

…力チンときた。『普通の子』…別に事実だから良いけど…本人の前で言つ？

「…どんな子だと思つてたんですか？」

「そうね…少なくとも私より綺麗で届かない様な子だと思つてた。」「

…すいません…」

本心じゃなかつたけどなぜか謝つた。

「謝る事じゃないわ。でも、本当に意外だつたのよ。」「

その時、ピッパーと笛の合図が聞こえる。

「一チの声らしきものが『15分休憩！』と叫ぶ。

「あ、それじゃ、私行くわね。」

先輩は立ち上がりつて私を振り返る。

そして、すれちがいざまに私にだけ聞こえる声でこう囁いた。

「良平ね、1年の頃、私に告白してきたことがあるのよ。」「えっ？」

私は急いで振り返つた。でも、そこに坂下先輩はもう居なかつた。ただ、一人になりたかった。

キミを見ていることが辛くなつた。

キミは、坂下先輩に告白したの？

私が初恋の相手ではなかつたんだね。

そういうえば初デートの時、『女の子とデートするのは初めて』と

言つてたね。

デートは初めてでも、初めて好きになつた人は私じゃなかつたんだ。

「デートが初めてなら、きっと私が全部キミにとつての初めてだと思つてた。思い込んでた。そんな自分が情けなくて…恥ずかしくて…気付いたら体育館を抜け出していた。

何気無く歩いていたら、また校舎裏に来ていた。

紅葉は葉を落とし、枝が丸見えだつた。

どこか寂しそう。

はあ…と溜め息ひとつ。

「有沢？ 有沢じゃない？」

紅葉の木の裏側から現れたのは…

「田辺君！」

「どうしたの？ 良平、もう練習終わつたの？」

「…ううん。ちょっと…。それより田辺君こそこそどうしたの？」

「…サボつた。」「えつ…？」

田辺君は、どんなに辛い練習でも、1回も休んだことは無かつた。少なくとも、亜花莉はそう言つてた。

「なん…で？」

「…俺も、キャプテンなんて失格なんだよ。」

そう言って、田辺君はドサッとその場に座り込む。つられて私も隣に座る。

「1年にさ、困つた奴が居るんだよ。そいつが、自分の通りにならないと気が済まない奴で…」

多分、キミが話題だね。

「そいつがさ、この前のレギュラー試験落ちたんだ。ま、正確には、こっちが選考したから落としたんだけど…。それが先週の金曜。」

亜花莉とケンカする前の日…

「したらさ、そいつ文句言い出したんだ。『自分より下手な奴が選ばれてるのに、自分が落ちるのは府に落ちない』って。」

「…すごい自信…。」

「俺、そいつに言つたんだ。『確かに前の技術は認めるが、サッカーはチームプレイだから、協調性のある奴を重視したんだ』って。

「…そしたら？」

「辞めた。部活。」

「…そうか…でも、正しい」と言つてるじゃない。なんでキャプテン失格なの？」

「そいつさ、友達5人と入部したんだ。その中の3人はレギュラーだった。」

「…それで？」

「そいつら含めて6人全員辞めた。その上練習中に接触事故があり2人怪我。部員が足りなくなつて、大会に出られなくなつた。」

それを言つと、田辺君はがっくりとうなだれた。

「ただでさえ部員不足で困つてたのに8人もいないと出場は無理。これまでやつてた事も水の泡。」

田辺君は溜め息をついて、

「チームプレイが重要とか言つて、俺が1番できてなきゃ、キャプテン失格だろ?なんか悔しくて…」

「…それで部活サボつたの?」

「まあね。きっと誰も来てないし。」

「えつ…」

「試合に出られないの分かったの今日だからさ…、どっちにしても今日は練習無しにする予定だつたし。」

「そつか…」

しばらく沈黙。

その沈黙を破つたのは田辺君だった。

「亜花莉、元気?」

「うん…ねえ、仲直りしないの?」

「仲直り?」

「うん…。亞花莉、寂しそうだったよ。田辺君も寂しいんじゃない?」

「…寂しいよ。でも、こんな俺、カツ「悪すさて見せらんないよ。」

「なんで?」

私は聞き返す。

「どうしてカツ「悪」とこり見せられないの?」

「どうしてつて…」

「私が彼女なら、全部見せてほしいけど?」

「なんでだよ。逆ギレしてんだぞ。部員にも愛想つかされたんだぞ。そんな姿見るのなんて絶対嫌だろ。ましてやそれが自分の彼氏だたら…」

「ううん。」

私は田辺君に向き直る。

「私なら、カツ「よくしてばっかりよりも、弱」とこりを見せてくれる方が嬉しい。」

「…なんで?」

「だって、カツ「よくしてるつて事は、自分を作ってるんでしょ? それよりも、素の…飾らない姿を見せてもらえた方が良い。」

田辺君はこっちをじっと見ている。

「作つてるのは疲れるでしょ? 恋人の前ぐらいなら、そのままでいてもらいたい。弱音吐いたつて、へこんだところだつて、私の前でだけでも見せてほし… そつ悪つのはおかしいかな?」

「しばらく沈黙。

田辺君を見る。

私の言葉を、ひとつひとつ整理していくよつな顔。

そして、自分で結論を出したのか、こっちを向いた。

「有沢つて、良いこというなあ。」

そう良いながらポンと頭に手を置く。

…良平君みたい…。

「そ…そつかな。」

「うん。良い奴。良平は幸せ者だな。」

「でも、亜花莉が彼女で田辺君も幸せでしょ?」

「うん。ホントだな。」

そう言って田辺君は微笑む。

私も笑う。

「ところどき、有沢はどうしたの? 良平は?..?」

私は言葉に詰まる。

「…田辺君、坂下麗先輩って知ってる?..」

「ああ、バスケ部の女子マネだろ。」

「…他に…何か知らない?..」

「どうした? なんかあつたのか?..」

「さつきその人に話しかけられたの。それで、去り際に”私は去年、良平に告白された”って…」

「ああ…その事…。」

「その事って、やつぱり知ってるの?..」

「うん…その頃はあんまり仲が良かつた訳じやないから詳しくは分からぬけど。」

「じゃあ、ホントなの?..」

「尊じやな。坂下先輩のファン、多いからな…俺は亜花莉が居るから興味なかつたけど。」

「…そなんだ。」

「でも、わざわざ言いわなくても良いじゃんなあ。自分から振ったんだろ。」

「そうみたいなんだけと…」

「あのテの女はプライド高そつだから、変に対抗意識持つんだよ。」

「…そなのかな。」

「そなだつて。今良平が好きで、彼女なのは有沢だろ。もつと自信持てつて。」

「うん…。ただね、そのひと”良平”って呼んでたの。呼び捨てで。

「ほう…。」

「なんか悔しいっていうか…どつちが彼女か分からないうつていうか。

「んじゃ、呼び捨てにしてみたら?」

「…えつ?」

「そうしたら解決するんじゃない?」

「…そう…でもないかな。」

「そうか…。」

「でも、思い込んでたんだ。良平君の初めて好きになつた人は私で、私の初恋が実のつたみたいに、良平君も初恋だつたつて…ちゃんと聞きもしないで…自分勝手だよね。」

「そうちなあ?」

田辺君が、口を挟む。

「俺、別にそうは思わないよ。むしろ良いことじやない?」

「そうちなの?」

「だつてさ、つまりはヤキモチ焼いてんだる。坂下さんこ。」

「…多分…。」

「あのさ、」

田辺君は少し遠くを見るような感じで続けた。

「恋すると、みんな自己チューになっちゃう訳よ。だろ?相手が一番大事なんだもん。だから自分を見ててほしいとか、好きでいてほしいで無意識に良い方に考え方やうんだよなあ。」

「…田辺君もそう…?」

「ああ、まあ俺が言つても説得力無いけど。」

小さく笑う田辺君。

「だから坂下さんを意識して、ヤキモチ焼いたんじゃない?」

「…そうだね。」

「つていうかや、一番分かりやすいのが良平だつて。」

「良平君？」

「ああ。絶対有沢しか見えてないぜ、アイツ。」

「…そう?」

「誰が見ても一目瞭然!」

「そ。だから、自分勝手で構わなによ。むしろ有沢はもつと血口ナリにならんべし。」

「ふふふ。そつか。」

恋は盲目って事かな?

「ありがとう。なんかそう言われたらスッキリした。」

「そう?それはどうも。光栄だよ。」

「ふふふ。亜花莉と仲直りするでしょ?」

「ああ。とりあえず今日電話してみるよ。」

「よしよし。その調子。」

「ははっ。頑張るよ。ありがとうな。」

「いえいえ。」

お互にクスッと笑う。

これで亜花莉も元気になるね。

そんな事を考えていたら、田辺君が唐突に聞いた。

「ところでさ、なんで有沢は俺の事、”田辺君”なの?」

「えつ…」

そんな事、考えたこと無かつた。

「何でつて…なんでだろう。田辺君も”有沢”じゃん…」

「そうだな。でもなんかそれで成り立つてるよな。」

「そうだね。これで使い分けてるし。」

「このままがいいね。」

「だな。」

私たちはまた笑いあつた。

「それじゃあ、この辺で。行くんだろ。」

「うん。体育館に行つてみるよ。まだ練習終つてないかもしれない。

「分かつた。気を付けろよ。」

「うん。また明日ね。」

「こうして田辺君と分かれた。

「まだいるかな…」

体育館に足早に行つた。

でも、練習はすでに終わつたみたいで、誰も居なかつた。

とぼとぼと帰る。

校門のそばに行く。

人影が見える。

近くに行かなくつても分かつた。

キミだ。

「優梨…！」

「良平君…。」

キミが駆け寄つてきた。

「帰り、いつもの場所に居なかつたから…」

「ごめん…」

「もう少し待つて来なかつたら帰るつもりだつた…いくか。」

「うん…ホントにごめんね。」

いつもの様に歩き出す。

でも、キミはどうかおかしい。

いつもはキミの方から聞かなくつても話しかけてくれるのに…。

空気が重い。

いつも私たちではなくなつていた。

そして、その沈黙を破つたのもキミだつた。

「何してたの？今まで。」

「何つて？」

「いや…」

何か言いたそうなキニ。

「どうして？なんかあつた？」

「言えないような事なのか…？」

「別に、そんなんじやないよ。」

「なら言えるだろ。」

おかしい。いつも良平君じゃない。

「どうしてそんな聞き方するの？」

「…男と居たって、本当か？」

「えつ…。」

思いがけない言葉に足をとめた。

何で知ってるの？

「ホントなのか。」

溜め息混じりに言いつキニ。

「誰から聞いたの？」

「麗さん。知ってるだろ？女子マネの。」

”麗さん”…。

キニの口から出てきた言葉に驚く。

「誰と居たんだ？」

口調が厳しくなるキニ。

「田辺君。」

「真章？…どうして？」

「たまたま見掛けで一人で話してた。」

「なんで？何を？俺と帰ることより大事な事だったのか？」

「お互い悩みを話し合つてたの。別に良平君が心配してることはないよ。」

無意識に冷たく言い放つた。

その態度が気に入らなかつたのが、キニは怒つて言つ。

「何だよ。何で悩みを打ち明けるのが俺じゃなくてアイツなんだ？」

「だからたまたまだつてば！それより、何で坂下さんが知ってるの？」

「知らないけど、練習終わったあと、耳打ちされた。」彼女、校舎裏で男といふよ”って。」

信じられない…。

あの人はあの後私をでつけてたんだ。
なんで…。

「なんで坂下さんの事、信じたの？」

「信じるよ。あの人はウソとか冗談とか言わねえし。

「やけに信用してるんだ…。」

「やだ…。私、なんでこいつ言い方しか出来ないの？」

「その言い方はないだろ。実際真実だったんだし。」

「そうだけど…でもやましい事とか言えないことを話してた訳じゃないよ。」

「なら、何言つてたんだよ。」

「…。」

私はまづつ向く。

キミの事。

キミの事を話してたんだよ。

なのに言えない。

すぐくもどかしい。

「ほら、言えないじゃん。麗さんの言つたとおりじゃん。」

「なによ…さつきから麗さん麗さんって！坂下さんは信用して、私は信じられないの？」

「だつて、矛盾してるじゃん。何にもないなら言えるだろ。」

「だから、何にもないってばー！」

「だからそれなら言えつてばー。」

お互い口調がきつくなる。

いつも私を気づかい、優しく話しかけるキミではない。

そんな状態にうんざりしたよつに言つた。

「田辺くんとはね、サッカー部の事を話したの。それから亜花莉とのこと…それと、良平君のこと…」

「…俺？」

不意をつかれたようなキミ。

「さうよ。良平君が坂下さんに告白したって話をしたの。ちょっとショックだつたけど、話してたら落ち着いたの。それだけ…」「なんだよそれ…何で…」

「さあ？相談すれば良いじゃない…麗さんに…私じゃ信用できないんでしょ…」「そうじゃなくて…」

「何？」

「何でお前がその事知ってるんだって聞いてるんだよ。」

「さあね。張本人に聞きなさいよ。」

「誰だよ…もしかして麗さんか？」

「知らない！もう知らない！」

私は逃げるよつにその場を去る。

みつともない。

カツ 「悪い。

最悪！

遠くで、”優梨…”と叫う声が聞こえた。

でも、無視した。

みじめだ。

あまりにもワガママだ。

胸が苦しい。

言葉にできないもどかしさが込みあげてくる。
声を出して泣きたかった。

私はひどい。

きちんと説明もしないで…一人で怒つて…。

坂下さんの名前を聞いたくなかった。

そして、坂下さんを信じ、名前を口にしたたキミがたまらなく嫌だった。

いや…。

私は足を止める。

もしかして、キミを坂下さんを嫌つ口実にした?

「最低だ…私…。」

ふと空を見上げる。

もう真っ暗だ。

キミは毎日…こんなに遅くまで部活をやつている。
それなのに、反対方向の私を家まで送り届けてくれる。
どんなに断つても…無理矢理でも送つてくれた。

私は私が嫌だ。

キミの優しさも、心配する気持も気付けなかつた私が…
涙が溢れた。

止めようとすると程、涙は止まらない。

止まらない涙が頬を伝う。

この涙はなんの涙?

次から次へと流れる涙の意味を自分に問いかける。

家に着いた私は、真つ先に自分の部屋のベットへ倒れ込む。
枕に顔を埋めて、火がついたように泣き出した。

ごめんね。ごめんね。こんな私で。

こんな子供みたいな…幼稚な私でごめんね。

怒つて、怒鳴ることしかできなくて…

心なかで何度もキミに謝つた。

しばらく泣いて、泣き疲れた私は仰向けになつた。

目は腫れぼつたい。

顔がヒリヒリする。

頭がボーッする。

ふと、ある事が頭をよ切つた。

無意識に出していた。

「明日…どんな顔して会えば良いんだろう…。」

もう、キミの顔が見れない。

キミとケンカ（後書き）

お待たせしました。11話です。前回からかなり経ってしまいました（汗）

話はシリアスで、次回に続きますが…どうなるのか私にも分かりません（苦笑）後編をお楽しみに！

最後に、毎回言つておりますが、メッセージやアドバイス本当にありがとうございます！今後も応援してやって下さい。それでは、1
2話でお会いしましょう！

キミとわたしとおかあさん

キミとケンカした。

初めて見た、キミの怒った顔…まだ私の頭と心に残っている。

ごめんなさい。こんな私で。

ごめんなさい。こんな彼女で…。

キミに会いたくない…というより、会えなかつた。どんな顔すればいいか分からぬから。

だから私は、次の日、学校を休んだ。

ウチの親は一人っ子の私に甘い。私が休みたいとか体調が悪いと言えば、必ず休ませる。

私はベッドの上に横になつていた。いつもならとっくに学校に行く時間だ。

ごめんね、良平くん。ズルイ私で。

ごめんね、お母さん。ズル休みして…。

悪いとか、いけないと、分かつてゐるけれど、私にはこゝにするしか出来なかつた。キミから逃げることしか。

私は目を閉じた。眠るつもりも、眠れるはずもなかつたが、朝食を取る気もなかつた。

今日は何の授業だつたつけ…。

国語：確かにキミが当たる番だつたはず。

この前の授業の最後に『次の時間答え教えて』と言つてたね。…大丈夫かな。

体育：最近は男子はバスケだから人一倍楽しんでやつてるね。

キミ程カッコよくショートを決められる人なんていないよ。

数学：キミは一番得意な数学の時間は、真剣になるね。私に教えてくれる程に。

…どの授業の時も、独りでに田はキミを追つていた。

こんなに好きなら…キミの事しか考えられないなら…なんでケンカなんてしたんだろう。

昨日から続いている後悔に、また今朝も涙を流した。

そのとき、勉強机の上の携帯が鳴った。

ウチの親は過保護なので、家から少しでも離れた高校に行くことが決まつたら、無理矢理携帯を持たせた。だから私も人並みに持っていた。

多分あの着メロは亜花莉だ。

事前に知らせていなかつたから、メールを送つてきたのだろう。わたしはベッドからゆっくりとダルそうに体を起こし、携帯を手に取つた。

やはり亜花莉からのメールだつた。

『今日は休み? 私、昨日真章と仲直りした。真章が優梨にお礼言つとけつて言つてるけど、何かしてくれたの?』
とあつた。そうか…仲直りしたんだ。良かつた。

今まで塞ぎ込んでいた気持が少し軽くなつていくのを感じた。そして、メールに返信する。

『仲直りしたんだ。良かった。昨日田辺くんと少し話したんだ。もしそれがキッカケで仲直りしたなら嬉しい! 今日は少し体調良くなつから休む。悪いけどテスト近いから、今日の分のノート見せてね。』

私は送信ボタンを押した。私は携帯を枕元に置き、またベッドへ横になつた。

心配事の一つは解決したが、一番解決したいことがまだできていな
い。キミとの事だ。

キミはどうしているだろう。

私の顔を見なくて済んだことにホッとしているの? それとも私が臆病者だと呆れた?
どっちにせよ、私にとつて悲しいのは変わらない。気まずい雰囲気が立ち込めるだけ…。

そもそも、どうして私は怒ったの？坂下さんの事だよね？

良平くんの彼女は私だし、彼女は良平くんと何かあつたわけでもない。…坂下さんは悪くない…。でも…。

私は自分が悲しかったんだ…。

同じクラスで、恋人同士でも…私には知らない事が多すぎる。でも坂下さんは違う。バスケ部のマネージャーで、1年の頃からのキミを知ってる。

そしてなにより…キミに告白された。

その後付き合つたのかどうかは分からぬけど、告白といつ事実が、私を苦しめているのは確かだ。

私は寝返りをうつ。部屋の白い壁をぼんやり眺めた。

…キミに会いたい。

…でも、会えない。

窓の向こうから小鳥の鳴き声がする。

空は青く、澄みきっている。

…私は一人、キミを思つて…泣く。キミは私を思つてくれているのかな？

…そんな事を考へていて、うとうとしてきた。

昨日の夜は、泣いては少し眠るの繰り返しで、きちんと寝ていられない。腫れぼつたいまぶたが重い。そして、私は瞳を閉じた。

…携帯の着メロが鳴る。

…どれくらい寝てたるう…。

私は着メロの鳴り終わつた携帯を見る。

…3時間は寝た…。携帯に起こされなければ多分もっと寝てただろう。

見てみると、メールが2通来ていた。一人は亜花莉。そのメールには、

『ノート、了解！それより、あんたち、2人そろつて休むなんて、どうしたのよ。』
とあった。

…あんたたち2人？それは、私と誰？

私は目が覚め、急いで短くメールに返信した。

『休んだって、私と誰？』

そう打つて、送信する。今は昼休みの時間だからすぐに返事が来るだろう。

そういうえば、さっき来たメールで2通のうち1通は見ていなかつた。受信ボックスを見る。未登録のアドレスだ。

そのメールの件名には…

『良平。』とあった。

キミからだ。

本文には、

『今日休んだんだろ。でも、仮病だろ。俺、放課後に行くから。』とあつた。

何がなんだか分からぬでいると、亜花莉から返事が来た。

『あんたらつて言つたら、前野しかいないでしょ』

とあつた。

…どういう事？

私はキミに、携帯の番号しか教えていない。

メルアドは今度教えてもらおう…と思っていたから…。

それなのに、キミからメールが来た。

放課後にウチに来るという。

…でも、キミは今日休んでいる…。ダメだ。話が繋がらない。

私は亜花莉に返信する事にした。

『本当に休み？あと、良平君に私のメルアド教えた？』

メールを送る。

もう一度受信ボックスを見る。
アドレスを見た。

『 basuke .love@ ...』

…良平君っぽい。

でも、単純すぎない？

私はとにかくそのアドレスにメールを送つてみることにした。

『本当に良平君？放課後にウチに来るの？でも、今日休んでいるんじゃない？』

…送信。

パタンと携帯を閉じてわたしは小さくため息をついた。
もし、あのメールが本当に良平君がくれたものだとして、本当に私の家に来るなら…なんて顔すれば良いの？

亜花莉からメールが来る。

『アド、教えてないよ。どうして？なんかあつた？』

…ますます分からぬ。

でも亜花莉に心配をかけたくなかつたので返事のメールは、
『ごめん。なんでもない。勘違いみたい。気にしないで』
と送信した。

キミはどうしたいんだろう…私とキミとの事。

ベットの上で、膝を抱え込むように座る。

仲直りはしたい。でも、その方法が見当たらぬ…。

携帯が鳴る。

キミからだ。

『アドレスは真章から聞いた。学校は休んでる。…これから行つても良いか？』

…えつ…。えつと…。

…どうしよう…。

ウチにはお母さんがいたはず…。休んでるのに彼氏が来たら変に思うかもしないし…。

でも、それは表面的な理由だ。心の中では…キミに会いたがつている。

『そりが、分かった。家に来ても良いけどお母さんいるよ?私は会いたい。』

送信。…今の気持に素直になつた。キミに、会いたい。

返事はスグに来た。

『じゃあ、理由をつけて、出でこれない？優梨が好きな秘密の場所に。』

秘密の場所…初デートの時にキミとタコ焼きを食べた、あの丘の上…。

『分かつた。やつてみる。行けそならメールする。』

携帯を閉じる。そして、同時に私は決意した。

「あら、優梨！起きても大丈夫？」

私が下へ降りると、その姿をとらえた母親が、心配そつと尋ねてきた。

私はそんな母親になるべく元気そうに言つ。

「大丈夫。それより…ちょっと出かけても良い？」

みるみるうちに、母親の表情は怪訝そつになる。

「どうして？どこに行くの？」

「薬局に…薬買いに行こうかなって…。」

すると母親は元の顔に戻り、

「あら、それなら私が買いに行くわよ。薬屋さん、遠いじゃない。学校休むような人が行く距離じゃないわよ。」

「…そうだね…。じゃあ、頼んでも良い？」

「モチロン。お昼はんをそろそろ作るから、食べ終つたら買いに行くわ。」

昼からか…。しあうがない。

「分かつた。じゃあ、お昼は食べるから、出来たら教えて。」

「はいはい。部屋で寝てるのよ。」

「うん。」

…私は部屋に帰つた。そして、キミに結果を報告。

『ゴメン、家からは出られなかつた…でも、昼からお母さん居なくなるから、その時にウチに来て。』

キミはどう思つだろ…。

私は少し残念だった。

前から大好きな、あの丘の上で話をすれば…素直になれたかもしが

ない。謝れたかもしれない。

でも、そんなの言い訳。ド「だらうど、よつは氣持の問題だよ。

私は、逃げてばかりいた。

でも、それがとても疲れることで、キミにも失礼だつて分かったの。
だからもう…逃げない。

…さつき、母親を説得しようと決心したときには、そう思つた。

携帯が鳴る。キミから。

『分かつた。なら、お母さんが居なくなる頃教えて。』

私はこう打つた。

『うん。待つてる。』

つて。

昼ごはんを食べて一段落した頃、お母さんは薬屋へ行つた。
薬屋は私の家からかなり離れた所にあるので、往復すると平氣で2
時間はかかる。

それにお母さんは夕飯の買い出しにも行くと言つていたので、帰り
はもつと遅くなるはずだ。

私はお母さんが居なくなるとすぐにメールを打つた。

『今、お母さんが出かけたから、来ても大丈夫だよ。』

…なんか、お母さんに悪かったな…。

ズル休みをした上に、わざわざ遠くまで薬を買いに行かせてしまつ
た。薬なんて要らないのに…。

でも、たまには嘘をつくのもしょうがないかもしれない。

私はずっと、良い子でいた。

今まで両親を心配させたり、困らせたりしたことがなかつた。離れ
た高校へ行くこと以外は…。

そんなことをぼんやり考えていると、玄関のチャイムが鳴つた。

キミだらうか…。でも、早すぎない?メールを送つたのは5分ちょ
いと前。

キミと私の家は、正反対の位置にあるはずなのに…。

違う人かもしれないと思いながらも、私は玄関へ向かつた。

ガチャヤシヒドアを開けた。キミが立つてこ。
キミは怒つているようにもしょげているようにも取れる顔をしてい

た。

「良平君…こりゃしゃー…。」

「うそ…。」

どこか気まずい雰囲気。

「とりあえず、あがつて。」

この空気が耐えきれなくなり、私は笑顔で言った。

「うん。お邪魔します…。」

キミは私の家に入る。確かに、今日が初めてだよね。
私の部屋へ案内して、私はベットの上、キミは床の座布団の上にそれぞれ座った。

少しの沈黙。

それを破つたのも、やはり私だった。

「今日、学校休んだんだね…。どうして?」

「…多分、優梨と同じ理由だよ。」

「そつか…。」

ダメだ…。余話にならない。

わたしはうつに向ぐ。

話題を探す。いつも意識しないで話していたことが、今は凄いことの様に感じてしまう。

その時、キミの声がした。

「なあ、俺が来た理由分かるよな?」

「えつ…。」

思い当たる事は沢山ある。

田辺くんの事、坂下さんの事…そしてケンカの事、仲直りの事…。

「分かる?」

「何となく…。」

「なあ、なんで昨日、あんなに怒つたんだ?」

やつぱり…昨日の事だよね。

「真章と何かあつたのか？2人で何してたんだよ。」

「だから、亜花莉との話を聞いたり、私は良平君との事を話したり…。」

「何で優梨があいつらの話を聞くんだ？」どうして真章に俺たちの話ををする？」

「どうして？お互いの相手の話をすることがそんなにいけないの？」
「なんで話す相手がそれぞれの相手じゃないんだよ？お互いの相手の事なら、本人ときちんと話すべきだろ。」

「なんで？なんで今日のキミはこんなに頑固なの？」

「相手に直接言えな」こととか、グチとかつてあるじゃない。それを言つのもダメ？」

「それならなおさらじゃないか。俺に言いたいことがあるなら、真章じゃなくて俺に言えよ。」

「じゃあ、言わせてもらひうけど、」

私は立ち上がり、キミの隣に勢い良く座つて、キミを見た。

「良平君、坂下さんの言つことは信じられるのに、私の言つことは信じられないじゃない。」

「坂下さんって…麗さんか？なんで優梨がそんな事を気にするんだよ。」

「良平君、私が何も知らないと思つてるかもしれないけど…知つてるんだから！良平君が坂下さんに告白したことあるって！」

…言つちやつた…。これじゃあ、ヤキモチ妬いてるのバレバレじゃん。

「なんで…。」

「本人が言つたの。昨日…私に。私は普通の子で驚いたって。良平君は自分に告白したことあるって！」

「それは…。」

キミは何かを言いかけたけど、私は続けた。

「私が彼女つて知つてるのに…私の前で良平つて呼ぶんだよ。そり

やあ私は坂下さんより綺麗じゃないし、手の届かない様な女の子じゃないわよ。でも…良平君の彼女は私でしょ？なのに…良平君は私よりも坂下さんの方を信用してる。それが…すごく嫌。」

言ってしまった。見せてしまった。私の醜い…本心を。

「それ、言いたいこと全部？全部本当のことか？」

「…そう。」

急に恥ずかしくなった。キミから目をそらす。

「優梨…それだけを聞いてると…何というか…麗さんにヤキモチ妬いてるみたいに聞こえる…。後、勘違いしてる。」

「えつ…。」

勘違い？どの辺が？勘違いもなにも、全部坂下さん本人から聞いたこと。

そして…私が感じたこと。そのどこが違っているんだろう。

「あんな、麗さんには確かに告白したよ。でも…あれはゲームだったんだ。」

「ゲーム？」

「そう。俺、バスケ部の仲間とシユートのゲームしててさ…それで負けた奴は勝つた奴の言ひこと聞くんだ。」

「それで？負けたの？」

「うん…それで、罰ゲームとして、麗さんに告白する」となって…

…

「でも…ふつたんでしょう？坂下さんは。」

「いや、あの人はOKしたんだよ。だから…俺、焦つて…急いで謝つたんだ。」

「そうしたら？」

「あの人、態度が急に変わった。俺のこと、散々否定した。それで、部活とか用がないときは完全無視になった。」

「…でも…怒つてもしょうがないよ。ゲームで告白されたなんて、誰だつて傷付く。」

「ああ…だから俺もしあうがないなって思った。でも…」

キミは私を見た。

「優梨にそんな事言つたなんて、許せない。俺に怒つてるだけなら良いけど、それと優梨とは全く関係ない。」

「でも…良平君は坂下さんの事麗さんつて呼んでるじゃん。」

「それは部の方針なんだ…それをいうなら後輩の女の子も俺のこと呼び捨てだぞ。」

「うん…。」

「…嫌?」

「…ちよつと…でも…大丈夫。」

「…」めん。でも…俺、何とも思つてないよ。」

「分かつてる。」

「…それに…俺も優梨の事、怒れないや…。」

「えつ…?どういうこと?」

「優梨、麗さんにヤキモチ妬いてたろ。」

「…うん…。」

「俺もヤキモチ妬いてた。」

「えつ…。誰に?」

「真章。」

「どうして田辺くん?」

「俺、優梨が俺たちのことを俺とじやなくて、真章と話してた事が許せなかつた。」

「…良平君…。」

そつか…私が嫌だつた様に、キミも嫌だつたんだね。

「俺、別に麗さんの方ばっかりを信じてる訳じやないんだ。優梨が

…男と居るつて聞いて…カツとなつて…ただそれだけ。」

キミは寂しそうな顔。大丈夫。嘘じやないつて分かるよ。

「つまりはさ、私たち、どっちもヤキモチ妬いてたつて訳?」

「まあ…つまりは。」

「…じゃあ…お互い様つて事で…仲直りしよう。…私が一人で怒つてたんだけど…。」

「ううん…。俺のせいでもあるよ。」めん。悪かった。これからは、優梨の事、もっと大切にする。」

「私も…良い彼女になれるように頑張る。」

「おうひ。んじゃや、とりあえずケンカは終了とこりとこり…。」

「はいはい。…これからもヨロシクね。」

「なに?改まって。俺もヨロシク。」

キミは優しく微笑む。あ、やっとキミの笑顔が見れた…。心が…あつたかくなる。

「ふふふ。」

私は少し思ひだし笑い。

「えつ?なに?何がおかしいの?」

「思いだし笑い。」

「…なんの?」

「だつて、良平君のメルアド…『バスケラブ』なんだもん。」

「しようがないだろ。他に思いつかなかつたし…気づいたら周りにも定着したし…。」

「なんか、良平君らしいな。でも…単純すぎて、初めは本当に良平君か疑つてた。」

「なにそれ、ヒドッ。」

キミは大袈裟にショックな顔をしてみせる。

「でもね、」

私は少し笑つてキミを見る。

「私、好きだよ。良平君のそういうところ。」

「…そう?そんな風に言つたのつて…優梨が初めてかも。」

「そうなの?」

「だつて、他の皆はバカだなあ~ってしか言わねえもん。やっぱり優梨は面白い。」

「…たまには面白い以外の誉め言葉が良いな…。」

「だから、面白い以外の誉め言葉はないの。最上級で類似表現は無し。」

「なにそれ……ヒヂイ……。」

「んな事無いよ。もつと喜べって。」

「もつ……。」

私はほっぺをふくらます。

そして、キミと笑いあつ。

やつと戻つてきた…優しい時間。

やつと戻つてきた…優しい声。

心が…優しくなれる。キミのおかげ。

ありがとひ。

大好きだよ。

その時、玄関の方からガチャツと音がした。ガサガサヒビール袋の音もある。

「良平君…お母さん帰つてきた…。」

「マジ?俺…帰つた方が良いかな…。」

キミは少し慌てる。

「あつ…でも…。」

「何?」

私はあることに気づいた。

「クツツ…玄関だよねえ?」

「あ、つ…。」

固まるキミ。その時、追い打ちをかけるように、部屋へ近づいてくる足音…。

「お母さんがあるよつー…」

「…適当に」まかして…。」

キミはすでに諦めモード。

すると、案の定お母さんが入つてきた。

「優梨、お友達来てたの?」

お母さんはかなり怪訝そうな顔で、私とキミを交互に見る。

「あのね、お母さん、良平君は今日私が休んだから明日の事、教えてくれたの。」

…我ながらありそつな、無さそつなウソ。キビシイかも…。

「明日の連絡ねえ…。それなら携帯でも出来るんじやない?それに、

今日は学校終るの早いわね。」

…最もです。他の言いわけが思い付かない。

すると、キミはお母さんへ正座して向かい、普段はあまりしない、真剣な顔で話だした。

「あの…。僕は、前野良平と言います。優梨さんと付き合つてます。

「え、つ…?!

一同、啞然。お母さんも、予想していなかつたせいか、目をパチクリさせている。

「実は、僕ら、昨日ケンカしてしまつたんです。」

「ケンカ…?」

お母さんはなにがなんだか理解しきれていない表情。

「それで、2人共今日はズル休みしてしまつたんです。その上、お母さんの田を盗んで2人で話し合おうとした…。」

「ちょっと待つて。」

キミの話を止めたのは、お母さんだった。

「どうして私に隠れて会おうとしてたの?」

「それは…お母さんが気を悪くするかも…と思つて…。」

キミはたじろぐ。お母さんは続ける。

「確かに娘の彼氏なんてショックよ。でもね、隠れてコソコソ会われるのはもつとショックよ。」

「そうなの?」

私が驚いた。

「そうよ。それに、きちんと紹介してくれないと、私に会わせられないような彼氏じゃないかつて、不安になるじゃない。」

「そつか…。言われてみればその通り。

「すいませんでした。改めて挨拶します。これからも、よろしくお願ひします。」

そう言つて、キミはふかぶかと頭を下げる。

するとお母さんが少し笑つて、

「良平君… だつて？ 良い人そうで嬉しいわ。 優梨の事、こちからや
よろしくね。」

と言つた。

「ありがとうござりますっ！」

とキミが笑つてこっちを見る。私も微笑む。

「優梨のお母さんって… 良い人だな。」

帰る間際にキミは私にこう言つた。

「せう？ お母さんも、良平君の事、気に入ってるみたいだつたよ。」

「せう？ なら良かつた。んじゃ、ほちほち帰るかな…。明日は学校
来るだろ？」

「うん…。良平君も行くよね？」

「ね。じゃ、また明日なつ！」

「ひとい・また明日つ！」

キミは軽やかに自転車をこいで帰つていく。

やつと戻つてきた…。キミに笑顔でまた明日と言える日が。
家に入ると、お母さんに言われた。

「良平君、良い人じやない。良い彼氏見つけたわね。」
つて。

切なくなつたり、暖かくなれる。

前野良平。キミの名前。素直に笑いあえる、キミの名前。

#IIとわたしとおかあさん（後書き）

前回から1ヶ月近く経つての投稿です。遅くなつてすいません。
2人は、ようやく仲直りできました。亜花莉と真章も仲直りしました。
私も嬉しいです。

次回は新展開を考えているので次も是非見てやって下さい。
メッセージや評価、本当にありがとうございます。励みにして執筆
頑張ります！

それではまた13話でお会いしましょー！

オマジナレ

「おー、前野！」

オレはバスケの監督にいきなり呼び出された。

「はい、なんでしょうか？」

息を切らして監督の方へ走っていく。

「前野、お前は背が高いんだからもつと積極的にボールに触れ。それができればお前はもっと強くなれる。」

「はあ…。」

訳が分からなかつた。わざわざそれを言つたために、練習中に呼び出すなんて…。

「あのな、スタメンで使つてた、山川って居ただろ。アイツ、ケガして明後日の練習試合は無理なんだと。そうなるとレギュラーが1人いるんだよな~。」

「えつ…監督…それって…。」

「一応、今日のお前の頑張り次第で決めようと思つてこる。しっかりな。」

そう言つて、監督はオレの肩をポンと軽く叩いた。

「はいっ、頑張りますっ！」

オレは周りが驚くほどに大きな声で返事をした。

「良平、はい、タオル。」

そう言つて、オレの前に白くて細い腕がのびてきた。振り返ると麗さんがいた。今は休憩中だ。

「…どうも。」

ワザとそっけなく振る舞つた。

麗さんは…アイツを傷つけた…。でも、その原因はオレにあった。

「そうだ、この前、彼女見たよ。いつも練習見てるよね。今日は居ないけど。」

「…今日は委員会があるから終るのがちょいとオレと回り回りにな

「…………」

「へえ～。そうなんだ。」

麗さんはこっちを見ない。何を言おうか考へてこる。

「ね、彼女、スキ？」

いきなり近付いてきた。

「好きです。」

「そう。でも彼女、知らないみたいじゃない。私と良平の事。過去にアンタが私にした事。」

麗さんは冷たいまなざしを向ける。

「…………麗ちゃん。」

オレは麗ちゃんを真っ直ぐ見る。麗ちゃんは少しだじりぐ。

「優梨にはきちんと言いました。オレが麗さんに何をしたか……。」

「それでもあの子、付き合つんだ。」

フツと鼻で笑う麗ちゃん。

「…………オレは麗ちゃんに何を言われても返す言葉もありません。オレはアナタを傷つけた。…………でも……アイツを……優梨を傷つけることだけはやめてください。かわりにオレに言つて下さ……。」

「…………悔しいのよ。」

「えつ？」

「何で私は罰ゲームの告白で、あの子は本気の告白なの？なんで私がじゃなくてあの子なの？」

「麗ちゃん……。」

「…………見苦しいわよね。『めんなさい』。もう、あんたたちの事に干渉しないわ。」

麗さんは少し歩いて、立ち止まった。

「あの子と別れたら……許さないわよ。」

小さくて、か細くて、咳くような声だったけど、オレには確かに聞こえた。

オレは笑顔になり、その場で

「はい。」

と小さく言った。

部活の終ったあとのミーティングで、監督から正式に発表があった。
「山川のかわりだが、前野を使う。前野、しつかりな。」

「はいっ！」

周りからは拍手が起つた。オレはただ、アイツに真っ先に聞かせてやりたいと思つた。

そのアイツを校舎裏で待つ。

すっかり日が落ちるのが早くなつた。吐く息が白い。冷たい空気が頬をさす。

ふともたれかかっている木を見上げる。

紅葉の木。今は葉がないが、秋口には綺麗な葉っぱをたくさん付けていたつけ。

そしてなにより…初めて誰かの前で…泣いた時も…この木の前だつた。

そんな事を考えていると、息をはずませてアイツが走ってきた。

「良平君…ごめんっ！遅れちゃつた…待つた？」

「待つた。10時間ぐらい。」

そう言つて、オレはニヤッと笑つた。

「…そ、ごめんね。10時間も。んじゃ、行こっか。」

アイツもイタズラっぽく笑つた。

優梨。オレの彼女。オレが涙を見せた唯一の人でもあった。オレたちは歩き出した。オレたちは自然と手をつなぐようになった。優梨の手は以外と大きい。

オレのアネキは多分優梨より小さい。

でも…自分よりも細くて長い指を見ると、やっぱり女の子なんだつて感じる。

「もー、委員長なんてやるんじゃなかつた！」

「えつと…文化委員だつて？文化祭は終つたけど、今は何やつてるんだ？」

「特に行事がないから、逆に何か無いかつて。それでみんな言つた

い放題。」「

そつ言つとアイツは

「困つたもんだ。」

と肩をすくめた。

「そつか…。大変なんだな…。あ、オレ、明後日の練習試合はスタメンで出してもうえることになつた!」

オレは今日一番のニュースを伝えた。

「本当に? スゴいじゃんつ! 嬉しい! 良かつたねつ!」

優梨は頬を赤らめながら、笑顔で喜んでくれた。

「おうつー! まだレギュラーの代わりだけど。」

「そつなんだ…。でも、選手は選手じゃん! 頑張つてね! 応援に行きたいな…。」

「…でも、遠いぞ。無理して来なくとも良いから。」

オレは優梨を見つめて続けた。

「優梨は、来れなくてもずっと応援してて。結果は、真っ先に知らせるから。」

「…うん。分かつた。」

ちょっと落ち込んだ優梨。オレはその小さい肩を抱きよせた。

「そんな顔するなよ…。笑つてくれ。」

「良平君…。」

「優梨が笑うとな、オレ、無敵になれるんだよ。だからさ、笑つてくれ。」

手をつないでいるときより、アイツの匂いが近くなる。あつたかくて、包み込んでくれるような、優しい匂い。

「…うん。分かつた。」

優梨はオレの腕からすり抜けて、優しい笑顔で言った。

「頑張つてね! シュートバンバン決めちやつて、レギュラーになつてよ!」

「おう、まかせとけ。あ、優梨の家だろ。もつ着いたよ…。」

「ちよつといや、かなり寂しかった。」

もつと一緒に居たい。アイツの笑顔と声で包まれていたい…。

「あ、本當だねえ…残念。また、メールとかして。」

優梨は家の門を開ける。そして、オレの方に近付いて、そつと唇に触れた。

「…またあした。」

暗くてはつきりは分からぬが、かすかな月明かりに照らされた優梨の顔は、きっと真っ赤だらう。

オレは微笑んで、

「またあした。」

と言った。

優梨を待っていたときよりも辺りは暗くなり、寒さも増してきた。でも、オレは全く寒くなかった。全身、なんとも言えないぬくもりで満たされている。

オレは家へ帰る。優梨の家とは正反対だ。でも、絶対に帰りは優梨を送つて帰る。

心配だ…といつこともあるが、何よりアイツとずっと一緒に居たかった。

オレたちはなかなかお互いの時間が合わない。だから、帰りぐらいは一緒に居たい。

アイツはオレと同じ思いらしく、帰りの時間が違っていてもオレが終わるまで待つしてくれる。

ワガママかもしれない。子供のかもしない…。

でも、オレはアイツが大好きだ。可愛くて…愛しくてたまらない。ずっと好きだった。初めて見たあの時から…。

『前野君、コレ、落ちたよ。』

少し笑つてオレの手元から落ちた紙を手渡すアイツ。

その紙は国語のテストの解答用紙だった。

『あ…ああ…ありがと…。』

アイツの手から奪うようにテスト用紙を取りあげる。

確かアイツはクラスの最高点だった。

オレはおやおやと聞いた。

『……点数…見たのか…？』

『「うん…じめん…でも、99点なら全然悪くないんじゃないかな…」
と言つて、優梨は不思議そうな顔をして去つて行つた。

99点？いや…そんな事はない…。…もしかして…！

オレは自分の解答用紙を見た。

…66点。…アイツ、逆から見たのか…？6が9だと思つたのか…

?…変なヤツ…。

…これが、オレと優梨との出会いだった。

アイツは覚えてないかもしない。でも、オレには忘れられない思い出だ。

…ヤバイ…思い出しだけで口元が緩む。…笑つてしまつ。

「あー、もう、ダメだな、オレは」

口にだして高ぶる気持を抑える。

オレは走り出した。

このままだとまたアイツに会いたくなつてしまつ…。

ダメだ。オレは明後日の事を考えないと…！

寒くて暗い夕方、アイツの家と反対方向にあるオレの家へ、オレは走る。

顔が赤いのは、寒いのと走つているのと…アイツのせいだ。

優梨…好きだよ。

ずっとオレの横で笑つてくれ。その笑顔で、オレは強くなれるんだから…。

有沢優梨。アイツの名前。居心地がよくて、あつたかい、聞いただけ元気になれる、アイツの名前。

オマージュ（後書き）

いかがでしたか？今日は良平目線で小説を書いてみました。良平は優梨の事をこんな風に思っているのか…とか、優梨とわかれた後はどうしているのか…とか、少しでも想像して下さると嬉しいです！それでは、次は14話でお会いしましょう！また感想等下さい。それでは、

キミとわたしのみち

朝、目が覚めてキミを思つ。今何してゐのかなつて。
夜、寝る前に、またキミを思つ。

キミが良い夢を見られますよつにつて。
そして、オマケでキミの見る良い夢に、私が居ますよつにつて。
学校帰りのファミレスに、私たち4人がいた。
今日はテストで部活もないのにテストよりみんなで過ごす方を選んだ。

「でもさ、なんか新鮮だねえ。学校以外でこいつしてるのは。」

亜花莉がしみじみ言つ。

「確かに…4人でつていつのはあんまり…。」

私も呟く。

「つていうかさ、問題は今がテスト期間だつて事じゃない? 約一名
また赤点取りそうな奴がいるし…。」

田辺くんはそう言いながらキミを見た。

「つるせえなつ。この前のは解答欄1つづつずれてて、気がついたら
終わる5分前だつたんだよつ。」

キミは必死に反論する。顔がマジだ…。

「はいはい。でも、そういうのも赤点ギリギリじゃなかつたか
なあ…。そんなんでどこの大学に進学するんですかい? 良平さま。
からかう口調の田辺くん。

…えつ? ! …進学?

「あ…あのさつ、良平くん、大学に進学するの?」

私は慌てて尋ねる。…初めて知つたよ…。

「うん…あれつ? 優梨に言つてなかつたつけ?」

「うん…初耳…つていうか良平君と進路の話つてしたこと無い気が
する…。良平君つて、将来は何するの?」

「えつ…俺は…。」

ナゼか口^いじもるキミ。…言えないような事なの……？

「有沢、コイツん家、何してるか知つてる?」

田辺君が私に聞いた。…知らない…。

「…『』めん…知らない…。何してるの?」

「コイツん家、医者。良平のお父さんは小児科・内科の診療所やつてるの。…知らない?『前野医院』つて。」

「…医者つ?…だつて、良平君、そんな事一言も…。」

…知らなかつた…。

そういうえば、キミは私を家まで送つてくれるけど、私はキミの家に行つたこと無かつた…。

「だつて前野のお姉さんつて、確かに看護師でしょ。お母さんは薬剤師だし。」

「えつ…じゃあ、良平君も将来はお医者さん?」

「なつ…なれないよ。普通に考えろよ…。俺、こゝん中で一番頭悪いぞ。」

「…じゃあ…何になるの?」

「…決めてないんだ…。やりたい」とを見つけるために大学行くのもアリかなつて…家居たつて…家業継げつてひるむこし…なりできるだけ長く学生で居たいなつて…。」

「…そなんだ。」

知らなかつた。キミの家のこと、キミの進路の事、キミの思つてゐる事…

「あ、亜花莉は将来、何したいの?」

田辺君が聞く。

「私はデザイナー。いつか自分のブランド作るんだつ。」

亜花莉がいつになく力を込めて言つた。

亜花莉の夢は前から知つてた。だから将来は専門学校に行くみたい

…。

「真章は何だつけ?」

キミが聞いた。

「俺？公務員。」

「ヤニやしながら田辺君は言つ。

「公務員って…いろいろあるだろ。何の公務員だよ？」

「俺さ、警察官になりたいんだ。」

誇らしげな田辺君。

「警察官？すゞいじやん…でもちよつとイメージが…。」

「あ、ひつでえな。有沢。お前、逮捕するぞ。」

みんな笑う。…デザイナーと警察官のカップル…なんか面白いな。
「んで？優梨は？」

キミは私に聞いた。

「…私は…みんな笑わない…？」

とりあえず確認。

「笑わないよ。言えよ。」

キミがせかす。

「私ね…保育士になりたいんだ…。」

私は思いきつて言った。…ずっと前からなりたいと思つていた事だ。

「保育士かあ…知らなかつた。だつて優梨、今までそんな事一度も
聞いたこと無かつたもんね。」

亜花莉が驚いたように言った。

「…意外？…私、なれるかな…。」

「なれるよ。有沢、ピッタリじゃん。」

田辺君も笑顔で言った。

私はキミの方を見た。

「うん。優梨、ピッタリだよ。笑われるような夢じゃないよ。頑張
れよ。」

「うん。ありがとう。」

私は微笑む。この4人で居ると、自然に笑える。安らげる。不思議
だな。

…でも、キミとこるときは…もつと…。

「それじゃ、俺ら、帰るわ。」

「

田辺君と亜花莉が立ち上がる。

「私たちもよっか？」

私がキミに聞く。

「そりだな……帰るか。」「

私は支払いを済ませて外に出た。

外の風はやっぱり冷たい。私は寒くなつて首に巻いたマフラーに顔を埋めた。

「それじゃ、またな。」「

「またあした。」「

私たちは別れた。田辺君と亜花莉、キミと私に……。

「それにしてもさ、」

キミが私に話しかけた。

「みんなそれぞれ将来の夢つて決まつてたんだな。……俺つて結構曖昧なんだな……。」

「どうして？そんな事ないよ。」

「だって俺、心の底で、『本当は医者になりたいかも』って思つてる。」「

キミは私と田を合わせず、遠い空を見ている。

「なんで？なれば良いじやん。なれるよ。良平君なら。」「

「優梨、今からじやもう間に合わないよ。本気で医者を田指すならもつと前からたぐさん勉強してなきや。」「

「良平君さ……最初からあきらめてるじやん。」「

「えつ……？」「

私は自分で驚くような少し強めの口調で話した。

「綺麗」とかもしれないけど、やるだけやってみれば良いじやん。する「」ことが出来たのにしなかつたら、後から後悔するよ。私はそんな良平君、見たくない。」「

きまずい沈黙……。

ちよつと言ひ過ぎかな……。

でも、これが私の気持ち。医者を田指すのもあきらめるのもキミだ

けど……。

私が頭でイロイロと考えていると、キミが突然口を開いた。

「俺、医者を田指しても…良いと思う?」

「えつ…。」

「俺さ、やっぱり将来は医者になりたい! 優梨は今からでも間に合うと思うか?」

「モチロン。良平君、この前の試合の時に頑張って、ちゃんとレギュラーになれたじゃん。」

キミはこの前の試合で、足りなくなつたメンバーの代役として試合に出た。

その時に一人で5点を決める大活躍で正式なレギュラーになった。

「…」うと思えるの、優梨のおかげだよ。…今まで、嫌なことは避けてたんだよね。それでも何とかなつたから。でも、自分の人生までそうなりたくは無いな。」

キミは真剣な顔で話す。…いつものキミだよ。…私の大好きな…キミ。

「だからさ、もし俺がまたあきらめそうになつて弱音吐いてたら、また優梨が俺を叱つてくれないか?…情けないけど…。」

「叱つてだなんて…。私は自分の気持ちを言つただけだよ。…でも、分かつた。なら、一緒に頑張ればいいことだよ。」

「えつ…?」

「私ね、大学入りたいの。保育士っていうより、幼稚園の先生になりたいから。そのためには短大より大学がいいかなつて。」

「…じゃあ、夢は違うけど目の前の目標は一緒…つて事か?」

「うん。だから、私は良平君が頑張る姿みて頑張る。」

「俺も優梨が頑張る姿みて頑張るよ。」

「うん。」

私たちは笑いあつた。そして手をつけないで私の家を田指した。

未来の事なんて想像もつかないけど…頑張った人には絶対結果が返つて来るって信じてる。

前野良平…一緒に頑張るって決めたキミの名前。
私は頑張りたいって思わせてくれる、キミの名前。

#IIとわたしのみりこ（後書き）

今回は高校生っぽく、将来について書いてみました。（当初は良平が医者になるなんて考えてもなかつたですが（笑））みんなそれぞれ個性的な夢を持つてます。どうなつていくかは私も考えてませんが…。

それでは今回はこの辺で。また次回、お会いしましょう！

キミが私に話した夢は、お医者さんになること。

大丈夫。キミならきっとなれるから。みんなはムリって言つたって、
私はだけは応援してるからね。

「優梨いーーー！分かんないよーーー。」

泣きべそをかきながら、向かい側に座るキミは机に突つ伏した。

「はいはい、どこが分からぬの？」

クスクス笑いながら私はキミに問い合わせる。

今、私たちは勉強していた。明日は期末テストの最終日だ。
医者になると決めたキミは前半にある教科を（数学以外は）捨てて、
後半の教科に絞り昨日から図書室で私と勉強していた。

「あ、だからここは問題文のこと」を読んでみるんだよ。」

「あ…ああーそっかあーありがと、優梨！」

キミの声が少し大きかつたのか、勉強中の生徒が一斉にこっちを向
いた気がしたので、私は慌てて口の前に指を立て『しゃーーー』と言
つた。

さすがにみんな、明日が最終日ということもあって、空気がピリピ
リしている。

医者になるためにはどのくらいの教科を勉強しないといけないか、
私とキミは昨日の放課後に本屋へ調べに行つた。

…思つていた以上に大変そうだった。

キミは数学以外は全部といつていいほど苦手なんだよね…。

キミの昨日の青ざめた顔が浮かんでくる…。でも、入試までは1年
ぐらいあるし…。

だから、キミと一緒に私も勉強するよ。

分からぬことは答えられる範囲で教えるよ。私、応援してるか

らね。

チラッと向かい側のキミを見ると、必死に考えていた。…解答欄は白かったけど…。

そうしてくると、図書の先生がみんなに向かつて言った。

「そろそろ下校時間なので図書室も閉めますよ。」

チラッと時計を見た。…もうこんな時間。外は藍色になつている。

「良平君、そろそろ帰ろつ。図書室閉まるみたいだし。」

「…うん。 おだな。 あー、疲れたあ！」

クスクス笑う私。私たちは勉強道具をカバンに詰めて図書室を出た。外との温度差に身震いしながらも、下足場を出で、私たちは帰りはじめた。

今日は一段と寒い。マフラーと手袋をしていても、すきま風が冷たかつた。

「寒いなあ…なあ、『コンビニ行かない?』

「賛成！ 暖まりに行こー！」

私たちは帰り道にあるコンビニに立ち寄つた。

曇つているガラスの自動ドアが温度差を表していく。

「あ…。」

キミは何か思い出したように口づぶやいた。

「どうしたの?」

「いや、ちょっと。オレ、買つもんあつたんだ。優梨、ちょっと待つてて。」

そう言ってキミは、なぜかレジに向かつて歩き出した。…ま、いつか。

私は立ち読みしていた。すると、意外と早くキミが來た。

「アレ? もういいの?」

「うん。 あ、優梨は何か買つもんとか無いの?」

「うん…。無いよ。…出る?」

「うん。 出よつ。」

私たちはコンビニを出た。もう少し居たかつたけど早く家にも帰り

たかつた。

店から出たとたん…あることに気づいた。

「あつ…雪…」

今年の初雪だつた。ふわふわした雪がいくつも降りてくれる。

「ホントだな…だからこんなに寒かったんだな…。」

「良平君、今日は送つてくれなくとも大丈夫だよ。家はすぐそこだ
し…雪まで降つちゃつてるよ。」

「平氣だつて。」

キミは何でもないと言つたのよつに平然としている。

「ダメ。良平君は良くても私が心配なの。」

キミの制服の裾を引つ張つて私は真剣に言つ。

「…分かつたよ。んじゃた…。」

キミはそう言つて、ロハビリのピールから、なにか手のひら程の
包みを取り出した。

「これ、やるよ。寒いし。」

受け取つてみると、暖かくていいにおい…。」れつて…

「…肉まんだ…」

私はつい叫んでしまつた。

「優梨、肉まん好き?」

「大好きなの!」

「良かつた…嫌いだつたらひとつ共食べてたけどな。
笑いながら言つキミ。」

そつか…レジに行つたのは、レジの横の肉まんを買つためだつたん
だね。

「ありがとう。」

私は心からお礼を言つた。

「ま、優梨には勉強教えてもらつてるし、ほんの気持ちですが。
おどけてみせるキミ。」

「いつも肉まんくれるならこいつでもやつちやおつかな。」

「冗談っぽく言つてみる私。」

「えつ……肉まんだけで勉強教えてくれんの？随分安上がりな先生で
すこと。」

「あー。言つたな。もう教えてあーげないつ。」

「『めん』『めん！』優梨先生いないとムリ～！許してよ。」

私はふと気づいた。

「良平君、今、優梨先生って言つた？」

「えつ……うん。」

「わあ、本当？私、優梨先生つて呼ばれるのが夢なの！なんか嬉し
い！」

しかも、それを言つたのが…キミだつたし。

「おいおい、言つたのがオレで良かつたのか？ホントは子供だろ。」「
いいの。先生は先生なんだし、良平君は十分子供だよ。」

「…優梨…最近真章や北里に…似てきた気がする…。」

「ま、いいじゃん。じゃあ、私はそろそろ帰ります。」

「おう。気をつけるよ。知らない人についていくなよ。」

「…良平君。」

「ははは。やつさのお返し。それじゃあな。」

「うん、また明日。」

私たちはそれぞれ反対方向へ歩き出した。

付き合いはじめてから、初めて一人でかかるかもしれない。ちょっと
と変なかんじ。

でも、私は抱えている暖かな包みを思い出した。
まるで、キミがここに居るみたい…あつたかい…。

降り続いている雪に、暖かさすら感じる。

ほら、また、キミのぬくもりが私の中に入ってきたよ。
あつたかいんだ。

やさしいんだ。

ここちいいんだ。

ただの肉まんも、キミがくれただけで、もっと嬉しくなる。

…おかしいかな。

… 私だけかな。

… ま、いつか。 私だけでも。

キミの役に立てるなら、そばに居られるなら… 肉まんがなくつたつて、勉強教えるよ。一緒に勉強しよう。

帰つたら… 真つ先に肉まん食べよう。

冷めてても良い。 多分キミのも冷めてるだろ? だから。

前野良平… ほかほかしてて、あつたかくて、大好きな… 私にとつて

肉まんみたいな… キミの名前。

明日もまた一緒に、肉まん食べたいな… そんなキミの名前。

#ハリセンベエマニ（後書き）

いががでしたか？今日は帰り道編です。タコヤキといい肉まんといい…食べ物に縁の深いカップルです（笑）

今回で15話目です。正直自分でもびっくりです。どいままで続くか分かりませんがこれからも頑張って執筆していきます

それではまたお会いしましょう！

キミの家で

舞い降りた雪。

ふわふわの雪。

今年初めての雪。

それはそのまま積もって、町中を真っ白にした。初雪が降った次の日、テストが終わった。

結果はまだだけど、キミは結構良かつたみたい。ガラツと私は窓を開ける。はく息は昨日よりも白い。

「うー…寒い…」

私は小さく身震いをしてすぐに窓を閉めた。

今日は休みだ。

何じよひ…もつテリストは終わった。勉強する気にはなれない。

その時、携帯が鳴った。キミからの電話だ！

私は急いで電話に出た。

「はいっ…おはよう、良平君？どうしたの？」

私は緊張と喜びが混ざった声で言った。

『おはよ。あのや、今日、ヒマ？』

『えっ…予定ないけど…どうして？』

『あのや、今日は先生の予定が入って練習無くなつたんだ。それで

…』

もつたいたぶるキミ。

「…それで…？」

『…今日…ウチ来ない…？』

『良いよ…良平君の家行くのって初めてだし。』

『マジで…じゃあ迎えに行く！何時が良い？』

『うーん…じゃあ9時半に…来てくれる？』

『9時半だな、了解…じゃあ、待つてて』

キミは嬉しそうな声。

「うん、じゃあ、後でね！」

『おひ、またな！』

そう言って電話を切った。

……キミの家に行く……。というより、男の子の家に行く……。私には初めての事だ。

……でも……何しに行くんだろう……？

ちょうどその時、携帯がまた鳴った。メール音だ。見てみると……キミからだった。

『さっきの追伸。勉強教えて欲しいから、もし良かつたら勉強道具持つてきなよ。』

……そうか……勉強……。

そうだよね、テストが終わっても……勉強しなきゃいけなかつたね……。

確かにキミは、先生から

「死ぬほどやらないと無理だ」「死ぬほどやらないと無理だ」
つて言われてたよね……。

私は急いでカバンに勉強道具を詰め込んだ。

そして、ご飯を食べ、着替をして、キミを待つた。

……8時27分……。

玄関のチャイムが鳴つた。私は出たがるお母さんを押さえ、ドアを開けた。

……キミが立っていた。

「おはよう

「おはよう」

息を弾ませ、頬も耳も赤くしながらキミは言った。

「おはよ」

そんなキミがとても嬉しかった私は笑顔で言った。

「『めんな……急に……』

「ううん。どうせヒマだったし……いつかこちを迎えてくれてありがとう。……上がっていく？ 寒かったでしょ？」

「ううん。オレは大丈夫。……優梨が良ければ……」

「私は良じよ。行こつか

私はお母さんの視線をムシして外へ出た。

空気が冷たい。

はく息は真っ白。

雪に足を取られる…。

「大丈夫か? コケんなよ」

キミは私の様子を見ながら歩くスピードに合わせて歩く。

「うん… 大丈夫…」

私はそう言いながらも必死で歩く。絶対にコケるもんか…!

ところが、たまたま足場の悪い所に足を置いたので体制が崩れた。

「あ…」

絶対コケた…。

そう思つたら… 体が妙に浮いた。

腕を掴む手…。

キミだ。

キミはニヤニヤしながら

「ほら、やっぱりコケた」

と言つて私を持ち上げた。

「…ありがとう…」

すごいな… 片腕で私を樂々持ち上げたキミ… 私は寒さと恥ずかしさで顔を赤らめながら言つた。

私たちは歩き出した。

すると、キミが急に私の手を掴んで自分のジャンパーのポケットに入れた。そして自分の手を私の手の上に重ねた。

「…道連れ」

「えつ?」

「次に優梨がコケたら一緒にコケてやるよ

「えつ… でも…」

「でも…?」

「…助けてくれた方が嬉しいかな…」

…少しの沈黙。

「あ、そつか…せうだよなー」「めん…」

キミはポケットから手を取りうとする。

「待つて！…やつぱり…」のままにこよ

「…そつ…」

そつ言つてキミは再び手を戻す。

キミの手と私の手が重なりあつ。

キミの手も、ポケットも…とつともあつたかいよ。
やつやつて私だけ、寄り添いながらキミの家に行つた。

キミの家に着いた。

大きなウチ…。

「俺んち診療所だつて…知つてるだろ？それは裏側にあるんだ」

そつ言つて家の向い側を親指で指すキミ。

「くえ…」

「最近急に冷え込んできたから患者さん、増えてるんだ。不謹慎だけどな…」

「…じやあ…誰もいないの？」

「うん。みんな診療所…あ、でも、だからって変なことはしないから…」

「…何も言つてないよ…」

私はキミの方を見る。

「あ…そうだな…」

キミは頭を搔きながら家の鍵を開けた。

キミの手と私の手が重なりあつ。

キミの手も、ポケットも…とつてもあつたかいよ。

やつやつて私たちは、寄り添いながらキミの家に行つた。

「お邪魔しまーす…」

中に入った私は驚いた。

まるで自分のいる世界とは全く違う世界に来てしまったかのようだ。

「広いねえ…」

「おー、そんなところで立つてないで、行くぞー。」

キミは照れながら私を手招きする。

「は…はあい…」

私は我に返り、キミの後を行つた。

螺旋状の階段をのぼり2階へ上がつた。

その間も度々高そうな絵や置物を見掛けた。

でも、すべて品のいい物ばかりで高そうに見えても、決して派手ではなかつた。

そうしている間に、キミはある部屋の前で止まつた。私も止まつた。

「门口」

キミは部屋を指差し、ドアを開けた。

キミの部屋は広くて掃除もきちんとされていた。

私の部屋より2畳分位広いんじゃないかな…。

「部屋、大きいね」

「…まあな…あ、俺、お茶持つてくれるよ！適当にくつろいでて」
そう言つてキミは下へ降りていつた。

くつろいでてつて言われても…なぜか落ち着かない…。

私はそわそわしながらベットの端に腰かけた。

その時、ドアの向こうで言い合つ声が聞こえた。

不思議に思つて様子を見ていると、ドアが勢いよく開いて女人人が入つてきた。

「あー、やつぱりーかーわいいつ」そう言つて女人人はこつちに入つてきた。

私がキヨトンとしていると後ろからキミが大声で言つた。

「おい、アネキ！入つてくれなよー。」

「えつ…？！」

「お…お姉さんなんですかつ？！」

私は突然の出来事に驚く。

「そつ。優梨ちゃんよね?いつも良平がお世話になつてます。姉の良美です」

ペロリと頭を下げ、無邪気に笑つた良美さん。笑つた顔は、確かにキミとそつくりだ。

「優梨、『ごめんな』急にアネキが出てきて…驚いただろ…」

「なによ、その言い方。休憩時間だから家に帰つてきてみたら誰か来てるみたいだから挨拶しただけよ」

最後にお姉さんは

「ねー」

とこつちを向いて言つた。

私は少し笑つてから

「はじめまして、有沢優梨です。以前、遊園地のチケットありがとうございました。…結局使わなくてごめんなさ…」

「あ、良いの良いの。後で聞いたら良平が時刻表間違えて持つていつたからなんでしょう?気にしないで。こつちこそごめんねー」

そう言つてお姉さんはキミの頭をポンポンと軽く叩いた。キミは恥ずかしそうに手をはらつて、

「もう良いだろ。俺たち勉強するんだからよ」

その言葉にお姉さんは反応した。

「…あんたさ…どうして急に勉強し始めたの?」

「どーでも良いだろ」

お姉さんは何か言つたそつたが、私がいるせいかそれ以上は何も言わず、ちょっと笑つて、

「そうね。ま、学生の仕事は勉強だからね。私はもう行くわ。じゃ

あね、優梨ちゃん」

「はー、さよなら…」

そうしてお姉さんは去つていった。

…ドアの向こうの廊下から、お姉さんの足音がかすかに聞こえた。

「…言つてないの?お医者さんになりたいって…」

「…言つてない。バカにされそだし…」

「…違うと思つたがな…」「良いんだ。今は勉強して、皆を見返してやるんだから。…あ、優梨は迷惑かな…」

「迷惑だなんて…思つてないよ。ただ、家族に協力してもいいのもう一つの方法じゃないかなって思つただけ」

「そうだな…ま、それは来年につけておくよ」

キミは笑つた。

私も笑つた。

「じゃ、勉強しようか」

私はカバンから教科書を取り出しながら言つた。

キミもベットの側のテーブルに勉強机から教科書を取り出して座つた。

どのくらい時間が経つただろう。
部屋にはシャーペンを動かす音。

時々キミが

「これってどうやるの?」

と言つて私が答えるが、それもすぐに止み、また元の静けさが戻る。
ふとキミを見た。

真剣な顔。

私の視線に気付いたのか、キミもじつちを見る。

「なんだよ」

笑つて言つキミ。

「別に」

笑つてまたノートに視線を戻す私。

こんなやりとりが嬉しくなる。

これから先、どんなことがあっても、キミといつしもいたい。
こうしていてね。

前野良平。キミの名前。ずっとずっと一緒にいるよ。キミも私の側
にいてほしい。そんなキミの名前。

キミの家で（後書き）

いかがでしたか？今日はある方からのアイディアで優梨が良平の家に行きました。ずっと出したかった良平の姉・良美も出せて個人的には満足しています。

さて、突然ですが次回で最終回になります。一番はじめに書いた小説だけに、思い入れが強い作品なので今まで以上に力を入れて執筆します。

それでは、最終話でお会いしましょう！

キミの事、ねえ、好きだよ。

あれから、10年が経つた。

私たちはそれぞれの目標に向かつて進みだした。

途中いろいろあっても、あなたが居たから乗り越えられた。

そう、実感できた。

あなたたちが居たから、毎日が鮮やかだった。

ありがとう…。

コシコシコシ…

少しヒールの高い靴をはき、右手にバックを持ち、左手に娘の手を握りながら私たちはある場所へ向かつていた。

「ママ、今日も行くの？」

「うう。真莉^{まり}はキレイ？」

「ううん。好き！」

満面の笑顔の真莉。

私も笑顔になる。

私たちが向かつたのは、ビルの前。

入り口の自動ドアが開く。

そこを左に曲がってドアを開けるとスグに受付だ。

「こんちは」

笑顔の受付嬢。

「予約していた田辺ですが」

「はい、それでは託児ルームにどうぞ」

「はい、どうも」

私は笑顔で言つた。

「おはようございます、おはようございます」託児ルームの方から声がする。そこには3人の保育士がいた。

その内の一人の前に立ち、私は話しかけた。

「おはよう、優梨先生」

すると、呼ばれた保育士は笑顔で言つた。

「おはようございます、田辺亜花莉さん」

すると二人ともお互いを見て笑いあつた。

あれから私は専門学校へ行き、ファッショングの勉強をして、小さな店を立ち上げた。

そして、真章と24の時に結婚し、娘を産んだ。ちなみに真章は予告どおり警察官になり、今は警視庁につとめている。

なかなか家に居ないけど、時間がある時は家族を第一に考えてくれる。

優梨は高校を出てから大学へ行き、幼稚園の先生の資格を取つた。そこで2年ぐらいつとめた。

前野はなんと、大学の医学部に現役合格！…信じられないけれどその後で見事に医師免許を取り、実家の前野医院を継いだ。

前野は医院を継いだとき、一つの夢があつた。それは…託児所の様な機能を持つた施設を病院を持ち、優梨と二人で運営して行くことだつた。

そのため、優梨は幼稚園を辞め、前野の手伝いをしながら夢を実現させた。

3階建てのビルを作り、その1階は託児所。2階は病院。3階は

前野一家が住む場所をそれぞれ作つた。

託児所は基本的に予約制。1日単位で子供をあずかる。それ以外に

も、急な用で子供をあずかって欲しい時は時間内ならいつでもあずかつてくれる。また、前野医院へ親が行くときに子供をあずかったり、子供を遊ばせるためにプレイルームという遊び道具がたくさんある場所を開放したりもしている。私は娘の真莉をよく連れていく。真莉は楽しそうだ。なので幼稚園が休みの日などはよく連れていく。

「おはよう、真莉ちゃん。今日もまた遊ぼうね」

しゃがみ、真莉と同じ目線になるようにして笑顔で話しかける優梨。

「うん。遊ぼうね、優梨先生！」

そう言つてにこにこする真莉。

私もつられて笑顔だ。それは娘に向けたものだけでなく、夢を叶えて輝いている友達にも向けていた。

今日は早く仕事が終わる口だったので、午後から私は亜花莉の家に遊びに行くことになった。

二人でお茶を飲みながら話をした。真莉ちゃんは一人で遊んでいた。

「それで？来月だつたつけ？」

亜花莉が紅茶をすすりながら言つ。

「…うん」

私は少し照れながら言つ。

「長かったよねえ…あんたら…ここまでもくるの…」

「そりか…振り返つてみたらあつといつまだつたけど…」

そう言つて、私は左手の薬指を見た。

キラキラ光る銀色のリング。キミからもらつた…婚約指輪。

私たちは、来月結婚する。でも…

「実感ないなあ…」

ボソッと独り言。

「何が？結婚すること？」

「うん…なんか戸籍が変わるだけって感覚なんだよね…」

「ついでに名字も変わるけどね」

「亞花莉が言つ。…まあ、そうだけど…」

「そりだけど…亞花莉は結婚して何か変わつた?」

「…そうねえ…真章、前より優しくなつたかな…」

「そりなんだ…」

「でも逆に些細なことでケンカばっかりしてた。価値観が違つて
いうのかな…とにかく細かい事が気になるの」

「…例えば?」

「エビフライにかけるのは醤油かソースか!」

「…ケンカしてたの?」

「かなり。1週間ぐらいい」「そりなんだ…」

「あ、勿論エビフライだけで1週間じゃないわよ。ケンカしあじめ
たら色々言い合つちやつて…」

「それで…?どうやって仲直りしたの?」

「私ね、」

亞花莉は思いだし笑いをするように少し笑つた。

「1週間たつた辺りから急にむなしくなつたの。バカみたい…つて

「…急に?」

「そりなの。それで、私は仲直りしようと思つてその日の夕食にエ
ビフライ作つたのよ」

「へえー…」

「真章はいつも帰りが遅いからいつもは先に寝てるんだけど、その
日だけは起きて待つてたんだ」

「うんうん」

私は頷く。

「夜の11時ぐらいだつたかな…真章が帰ってきたの。で、私が起
きてビックリした。それでなんて言つたと思つ?」

「謝つた?」

「うーん…惜しいな」

クスクス笑う亜花莉。

「真章は、『意地張つてごめん、仲直りしよう。エビフライ買ってきた』って言つたの」

「ええっ！ホントに？」

「それがホントなのよ。それでその後に一人でエビフライ食べたの。ちなみにタルタルソースつけてね」

亜花莉は笑つた。私も笑つた。意外だな……でも良いなあ……そういうの。

「夫婦つてそんなもんよ。ケンカしてもちゃんと仲直りできる」

「…そうだね。恋人なら出来ないかもね」

「そうよ。一度結婚すると、しそつちゅう別れられないじゃない？だから頭冷やす時間がちゃんと取れるの。仲直りもしやすいし、ケンカした後は相手の事が前よりも分かりあえたつて思えるんだ」

目をキラキラさせながら言う亜花莉。

私も、こんな夫婦になりたいな。

…なれるよね？

亜花莉の家から帰つたのは夕方。帰りに夕飯の買い物もした。

ガチャツ

ドアを開ける。

「あ、おかえり～」

奥の方から声がした。キミの方が早かつたんだ…。

「ただいま。今からご飯作るね」

「おう！腹減つたー！夕飯は何？」

「エビフライだよ」

そう言つて私はクスッと笑う。

キヨトンとするキミ。

「…なんか面白い事があつたのか？」

「うん、あのね…」

そうして私は夕飯を作りながら亜花莉たちのケンカの話をした。キミも私を手伝いながら笑っていた。

そしてその日の夕飯はエビフライ。勿論タルタルソースで食べた。

夕飯の片付けを済ませて私はソファーへ座り込んだ。

キミはお風呂…つまり、今は私一人。

私はふとベランダへ出た。

夜風が心地良い。

ぐーと腕を上にのばした。今日も無事に終了。

「おーい、風呂上がりたよ」

その時、キミが後ろから声をかけた。

「はーい」

返事をするものの、なんだかこの場から動きたく無かつた。

「どーしたの?」

キミがベランダにやつてきた。

「なんかね、ココが気持いいんだ」

「ほお…」

キミは私の横にやつってきた。

…しばらく私たちは何も話さなかつた。

車の走る音がする。

遠くで子供泣く声がする。

星がきれい。

「ねえ…」

キミに話しかける。

「ん?」

「ここまでくるの、長かつた?」

「どーしたの? 急に」

「いや… 今日亜花莉に聞かれてね… 私はあつとこいつ聞いて言つたけど」

「俺もだなー。受験勉強してる時とビルに開業する時は長かつたけ

どな

苦笑いするキミ。

「でもさー、私たちが出会ったのって10年前だよ?覚えてる?高

校時代」

「覚えてるよ。全部」

急に真顔になるキミ。

「私は…どうかなあー」

「えつ…忘れたの?ひでえ…」

「ウソウソ!覚えてるよ。」

「なら言つてみろよ」

「えつと、穴のあいた傘貸してくれたでしょー、レギュラー落ちて校舎裏で泣いてたし、あと遊園地に行く時バスの時間を間違えて結局行かなかつた。あとは…」

「あー、もー言つな!そんな事ばっかりかよ!」

キミは顔を赤らめて言つ。

「嘘だよ。他のも覚えてる。」

クスッと笑い、私はキミの目を見た。

「私、良平君に会えて良かつたよ」

「俺も」

そう言つてキミは私の肩に手をまわす。

「優梨に会えて良かつた。優梨が居てくれて良かつた。優梨が居るから俺、ここまでこれたんだ」

キミは私の耳元で優しく、囁くようにつぶやきながら言つた。

「好きだよ、優梨」

好き…その言葉はこの世の中で一番あたたかく、やわらかいものこ思えた。

「私も、好きだよ」

目を閉じ、キミに少し寄りかかりながら言つた。

大スキ。

キミが居てくれて良かった。

これからも、ずっと私の隣で居てね。

「はっ…はっくしゅん！」

唐突なくしゃみ。

キミだ。

「もう…結構良い感じだったんだけどな…」

私はそう言って少しふくれつづら。

「ゴメンゴメン…なんか湯冷めしたみたい…くしゅん！」

「あー、もう分かったからー早く中に入つてー医者が風邪なんかひいたらシャレにならないよー！」

「はーい。…あ、優梨も早く風呂に入れよな」

そのままひきこもるキミを一つして中に入つていった。

私はふう…と軽くため息をついた。

でも、急に嬉しくなつた。

好きだよ。キミの事。

ずっと変わらないでいてね。

キミの事、ねえ、好きだよ。

キミの事、ねえ、好きだよ。（後書き）

いかがでしたか？最終回と「つい」とで、その後のみんなを書きまし
た。

この作品は、初めてこのサイトで書いたもので、とても思い出深い
です。笑顔の場面を沢山盛り込む事と自分もこんな恋愛したいな…
と思える小説執筆を自己目標に書いてきました。ちなみに、この小
説は完結が17話と中途半端なので、いずれ続編を書くかもそれま
せん（笑）

ここまでお付き合って下りた読者の方々へ、心から感謝申し上げます。
次はまた別の作品（もしくは続編？）でお会いしましょうー本当に
ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1011a/>

ねえ、すきだよ。

2010年10月11日23時59分発行